

目 次

両学会長ご挨拶	… p. 2
実行委員長、副委員長ご挨拶	… p. 4
大会プログラム	… p. 6
会場案内図	… p. 9
シンポジウム	… p. 10
自由論題報告	… p. 21
クロージングシンポジウム	… p. 52

大会テーマ「地球的危機と平安文明の創造」

地球温暖化・異常気象や人口問題、エネルギー・資源問題、さまざまなレベルでの格差など、「収奪文明」がもたらす数々の「地球的危機」が押し寄せる中で、どのような持続可能な「還流的平安文明」（循環調和型の平らかで安らかな、平和・安心・安全・安寧の文明）を創造し構築できるのかを探る。

比較文明学会では、持続千年首都「平安京」という名を持つ「みやこ」京都で第30回という節目の学術大会を開催するに際して、世界各地の「みやこ」が、地震・津波・噴火・寒波・熱波・洪水・台風・エルニーニョ・ハリケーン・ツイスターなどの諸「災害」をどう受け止めながら生き抜いてきたのかを具体的に検証しつつ、「災害」に立ち向かう「みやこ」の比較文明論を討議していく。

比較文明学会第 30 回学術大会開催に寄せて

松本 亮三（比較文明学会会長）

この度、比較文明学会は、第 30 回という記念すべき学術大会を、地球システム・倫理学会第 8 回学術大会との合同開催として実施する運びとなりました。大会の準備に精力的にあたられてきた、鎌田東二委員長をはじめとする、大会実行委員会の皆様のご尽力に敬意を表すと共に、衷心から感謝を申し上げる次第です。

本大会は、実質的に学会創設 30 周年を記念する、翌年の第 31 回学術大会とともに、比較文明学会の 30 年の歩みを振り返り、これからの学会がめざすべき方向のみならず、人類文明が、その存続を賭して歩みを進めるべき、将来の道程を考える機会とならなければなりません。

人類が誕生してから 700 万年、私たち、ホモ・サピエンスの直接の祖先が誕生してから、20 万年という時間が流れました。しかし、人類文明がこの間に残した成果は、人類自身にとって、決して誇るべきものだけだったわけではありません。民族や国家など、諸集団間の紛争や戦争、強者による征服と弱者の支配が、人類の文明史に常に暗い影を投げかけてきたのです。私たちが生きる場、すなわち、人類とその文明を育んできた「大生態系」としての地球に対しても、文明の発達は、人類中心の思考と行動の下、深刻な影響を及ぼし続けてきました。その結果、資源の涸渇と地球温暖化をという結果を招いてしまったのです。総体としての人類文明は、また、地域や集団の生活様態としての諸文明はいかにあるべきかを考え、個々の地域文明間の、さらには、人類文明と地球との関係性をいかにして再構築すべきかが、19 世紀的ディシプリンを超脱した総合知に立脚して、いま問われなければなりません。

2011 年 3 月 11 日、わが国は、東日本大震災という未曾有の災害とともに、福島第一原子力発電所の事故という、偏った知の誤謬に起因する大惨事を経験しました。本年は、竹島や尖閣諸島の領有権に絡む近隣諸国との国際紛争が深刻化しつつあります。これらは、極めて遺憾なことですが、人類文明が本来内在してきた危機を象徴的に表しています。さまざまな災厄に打ち克ち、人類と地球の存続のために現代文明はいかにあるべきか、いかにして「平安文明」を創造できるか、その答えの一端でも明らかにすることが、第 30 回大会と、今後の比較文明学会に与えられた課題だと言わなければなりません。

本大会が、多くの会員の皆様のご参加のもとに、活発な議論を通して、文明の未来像を構想する上で実り豊かなものとなることを祈念してやみません。

比較文明学会第30回学術大会&地球システム・倫理学会第8回学術大会 開会ご挨拶

服部 英二（地球システム・倫理学会会長）

このたび京都大学こころの未来研究センターにおいて、両学会合同の学術研究大会が開かれることは、まことに喜ばしいことです。なぜならば両学会は根を一つにする姉妹学会であるからです。

今から30年前比較文明学会は伊東俊太郎先生を会長にいただいてスタートしました。そして8年前地球システム・倫理学会が同じく伊東先生を会長として設立されたのです。すなわちこの両学会は伊東文明学という大きな財産をそれぞれの土壌にもつとってよいと思います。したがって比較文明学会の松本亮三会長、鎌田東二実行委員長をはじめ多くの学究が両学会の会員となっています。私自身もそうです。

それでは何処が違うのでしょうか？学術的な質の高さ、その文明史への視座において、私は両者に違いがあるとは思いません。ただ地球システム・倫理学会は、伊東先生の説く第6の革命、すなわち環境革命を重視します。母なる地球と人類の運命を一心同体とみて、今こそ行動すべきだと考えています。

今日危機的状況に立ち至った地球環境問題に解決の糸口を見出すことは、宗教間の紛争の終焉と共にまことに切実な課題であります。そのために全人類の「価値」に関する意識改革が求められているのです。

「開かれた学会、絆を造る学会、発信する学会」を目指している地球システム・倫理学会が、東日本大震災の引き起こした原発事故に際し、2度にわたって発信した「緊急声明」には全世界から熱烈な賛同の声が寄せられています。

このたびこの記念すべき大会にあつては、囃らずも「言葉」が核心的主題となりました。「文化の多様性に関する世界宣言」(UNESCO, 2001)の視点から見れば、ただ一つの言語による世界の画一化が、人類にとって致命的であることは明らかです。言霊の形づくったこの国の、特殊な、しかし美しい言葉から、我々が世界に発信すべきものは何でありましょう？

「平安文明の創造」にもっともふさわしいこの千年の都で、この大会を可能にしてくださった実行委員会の皆様に心よりの感謝を申し上げます。

ご挨拶

鎌田 東二（大会実行委員長）

2012年のこの時期に、「地球的危機と平安文明の創造」という全体テーマを掲げて比較文明学会と地球システム・倫理学会の合同の学術大会が開催されることに、何とも言えない思いがあります。

というのも、24年前、「平成」という元号に変わったその日から、わたしは世界が「平成」とは反対の方に動いていくという、どうしようもない予感に捕われ、実に暗鬱な気持ちになったことを忘れることができないからです。

それから四半世紀、事態は次々と予感を上書きし、留まることを知りません。地球温暖化、異常気象、人口問題、エネルギー問題、資源問題、さまざまなレベルでの格差、この数年の比較文明学会のテーマを使って言えば、「収奪文明」がもたらす数々の「地球的危機」が押し寄せ、どのような持続可能な「還流的平安文明」（循環調和型の平らかで安らかな、平和・安心・安全・安寧の文明）を創造し構築できるのかが問われています。

そこで、兄弟・姉妹学会である比較文明学会と地球システム・倫理学会の合同大会では、まず比較文明学会が、持続千年首都「平安京」という名を持つ「みやこ」京都で第30回という節目の学術大会を開催するに際して、世界各地の「みやこ」が、地震・津波・噴火・寒波・熱波・洪水・台風・エルニーニョ・ハリケーン・ツイスターなどの諸「災害」をどう受け止めながら生き抜いてきたのかを具体的に検証しつつ、「災害」に立ち向かう「みやこ」の比較文明論を討議することになりました。

一方、地球システム・倫理学会は、さまざまな「地球問題群」を学問的に討議しつつその解決策を探り具体的実践へとつなげていく「地球と人類の未来を考え実践する会」で、新しい「地球主義と平和」を希求し、「地方から地球へ、競争から共生へ、エゴからエコへの枠組転換」と「物と力の僕としての知識から心と命の主としての智慧（普遍的真理、実践的倫理）への転換」をはかる学術機関であることを目指してきました。

その地球システム・倫理学会が比較文明学会との合同学術大会を行なうにあたり、「地球的危機と平安文明の創造」を全体合同テーマとしつつ、独自の個別テーマとして「地球問題群」の中から「心と命」を表わす「言葉」の問題を取り上げることになりました。

文明と文化の危機は、そこに生きる人々の「言葉」の危機として表われてくると考えたからです。その言葉の問題を根本のところから掘り下げ、「日本語」の「いのち」と「ちから」を、歴史・伝統知らないし古典の再検証と現状の再確認を踏まえつつ、再発見・再指定するチャレンジな試みをこの3日間の合同学術大会を通して探究していきたいと思います。

この探究が力強い未来を切り開いていく知と力とネットワークになりますよう心から祈るとともに、実行委員会・事務局として、不慣れではありますが精一杯務めさせていただきます。行き届かないところや不備・不足も多々あると思いますが、共に記念すべき合同学術大会として盛り上げてまいりたいと思いますので、よろしく願いいたします。

ごあいさつ

小倉 紀蔵（大会実行副委員長）

今回の大会は、比較文明学会と地球システム・倫理学会の合同開催ということで、秋の京都にてにぎにぎしく開催されます。講演・シンポジウムも盛りだくさんに企画されており、また自由論題報告も例年になく充実しております。

昨年度は、東日本大震災の惨状を受けてアカデミズムも深い傷を経験した年だったと思います。中央大学での昨年度の大会では、パネルディスカッションなどにおいて、人間と科学と生命をめぐり、実に真摯な討論が繰り広げられました。

あれから1年が経ち、われわれも少し態勢を立て直して、今後 50 年、100 年の展望を冷静に語る事ができる精神状態になってきたと思えます。その意味で、今年度にこのような合同大会を実施できることは、大変に意義深いことだと思えます。

ぜひとも新しい発見にあふれた、刺戟的な三日間にしていきたいと願っております。比較文明学会のみなさま方も、地球システム・倫理学会のみなさま方も、どうぞすべての俗事から解放されて自由な精神を遊ばせる三日間にしていきたいと思えます。

鎌田東二実行委員長を先頭に、長い時間をかけてこの大会を準備してきました。二学会の合同大会ということもあって、準備の事務は予想以上に膨大・複雑となりました。最後になりましたが、準備をとどこおりなく進めてきたスタッフのみなさま、また東京からボランティアで運営をお手伝いに来てくださるみなさまに、心から感謝申し上げたいと思えます。

大会プログラム

第一日

11月16日(金)

14:00-17:00 (於 大会議室)

地球システム・倫理学会主催 講演・シンポジウム「言葉の危機と再発見」

基調講演：山折哲雄（国際日本文化研究センター元所長・名誉教授）「日本語のいのち」

シンポジウム：「日本語のちから」

司会：松本亮三（東海大学・比較文明学会会長）

パネリスト： 佐々木瑞枝（武蔵野大学）「平安—和語の世界」

鈴木貞美（国際日本文化研究センター）「日本語の易しさと難しさ」

ポーリン・ケント（龍谷大学）「『菊と刀』から紛争処理へ」

鎌田東二（京都大学こころの未来研究センター）「神話と歌にみる言霊思想」

コメンテーター：伊東俊太郎（東京大学名誉教授）

服部英二（地球システム・倫理学会会長）

第二日

11月17日(土)

10:00-12:00 比較文明学会役員会

13:00-14:00 比較文明学会会員総会

14:00-18:00 (於 大会議室)

比較文明学会主催 講演・シンポジウム「みやこと災害の文明論」

14:00-15:40 講演

司会：阿部珠理（立教大学）

講演者：原田憲一（NPO シンクタンク京都自然史研究所）「災害の深化と減災の知恵」

鎌田東二（京都大学こころの未来研究センター）「持続千年首都・平安京の生態智」

松本亮三（東海大学）「文明の衰亡と災害」

16:00-18:00 シンポジウム

司会：中牧弘允（国立民族学博物館）

パネリスト：陣内秀信（法政大学）「イタリア（ヴェネツィア—水との戦いの歴史）」

村瀬 智（大手前大学）「インド」

秦 兆雄（神戸市外国語大学）「中国（新中国北京の防災減災政策と社会主義文明）」

18:30-20:30 懇親会（於 カンフォーラ）

9:00-14:30

自由論題報告

第一会場 (大会議室)

座長: 原田憲一・龍村あや子・阿部珠理

第二会場 (中会議室)

座長: 福永英雄・日置弘一郎・中牧弘允

第三会場 (小会議室 II)

座長: 榎本のぞみ・山下範久・保坂俊司

第四会場 (小会議室 I)

座長: 赤坂 信・加藤久典

* 自由論題報告の持ち時間は30分(発表:20分、質疑応答:10分)

* ベルは、15分で一回、20分で二回、30分で三回鳴ります。

14:40-17:40 (於 大会議室)

地球システム・倫理学会 クロージングシンポジウム「古典と伝統知」

座長: 丸井 浩(東京大学・インド思想)

講演者: 宮本久雄(上智大学・ユダヤ・キリスト教思想)

手島勲矢(日本学術会議・ユダヤ・ギリシア思想)

池田 修(大阪外国語大学名誉教授・イスラーム・アラブ文学)

井出 元(麗澤大学・儒教、道教思想)

コメンテーター: 鎌田東二(京都大学・日本思想)

板垣雄三(東京大学名誉教授・イスラーム思想)

自由論題報告 一覧

第一会場		大会議室
9:00-10:30		座長：原田憲一
清水良衛 (地)	文化・文明状況の現代への危惧—今後にどう備えるか—	
渋谷仙吉 (比・地)	生態系生命と有情生命の比較研究	
宮嶋俊一 (比)	近代文明批判としての環境思想	
10:30-12:00		座長：龍村あや子
濱田 陽 (比・地)	共有文明—ともにたもつ文明のかたち—	
平澤和夫 (比・地)	地球システムとしての市場金融経済に係わる倫理的考察	
須藤義人 (比・地)	霊性のコモンズ—琉球弧の島嶼文明の可能性—	
13:00-14:30		座長：阿部珠理
澤野雅彦 (比)	企業とスポーツの文明学	
平田俊博 (地)	日本語のちからと日本哲学	
鬼頭秀一 (地)	「人間の顔を持った技術」はいかにして可能か —技術の「多義性」とポストモダンの「最適化」に基づく新しい社会技術の提案—	
第二会場		中会議室
9:00-10:30		座長：福永英雄
牧 武士 (地)	地域資源を用いた環境調和型社会設立構想	
高橋誠一郎 (比)	司馬遼太郎の文明観—アメリカ合衆国の考察をめぐって—	
寺尾寿芳 (比)	逢坂元吉郎の公会主義	
10:30-12:00		座長：日置弘一郎
岡田宙子 (地)	現代諸問題に対する廣池千九郎の先見	
阪口有美子 (比)	古代日本海沿岸の祭祀儀礼に関する—考察 - 牛と赤織絹 -	
照屋ナツキ (比)	戦後沖縄の音楽活動にみるウチナーンチュの社会意識	
13:00-14:30		座長：中牧弘允
小山芳郎 (地)	「3・11」を日本の“ノー電気デー”に—人類存続のキーワードは“自制”	
岩佐礼子 (地)	頼母子講という自発的小集団の「創発」から捉えた内発的発展—宮崎県綾町の事例から—	
横山玲子 (比・地)	文明と調和を考える —比較文明学会第31回大会の開催に向けて—	
第三会場		小会議室Ⅱ
9:00-10:00		座長：榎本のぞみ
斉藤大法 (地)	人類普遍の叡智から地球システム・倫理を創造	
林 正博 (比)	封建主義に関する比較文明論的考察	
10:00-11:30		座長：山下範久
吉崎泰博 (比)	近代的自我の変容とその暴走—アメリカ文学の場合—	
秋丸知貴 (比)	自然的環境から近代技術的環境へ—ジョルジュ・フリードマンとヴェルナー・ゾンバルトを手掛かりに—	
汪 義翔 (比・地)	龍の起源と自然観—中国古代文明を中心に—	
13:00-14:30		座長：保坂俊司
後藤敏彦 (地)	社会的責任に関する各種国際的指導原則と人権・倫理	
西井美穂 (地)	ルドルフ・シュタイナーの思想における倫理性	
杉山秀子 (地)	チエホフ作『サハリン島』とサハリン開発	

第四会場

小会議室 I

9:00-10:30

座長：赤坂 信

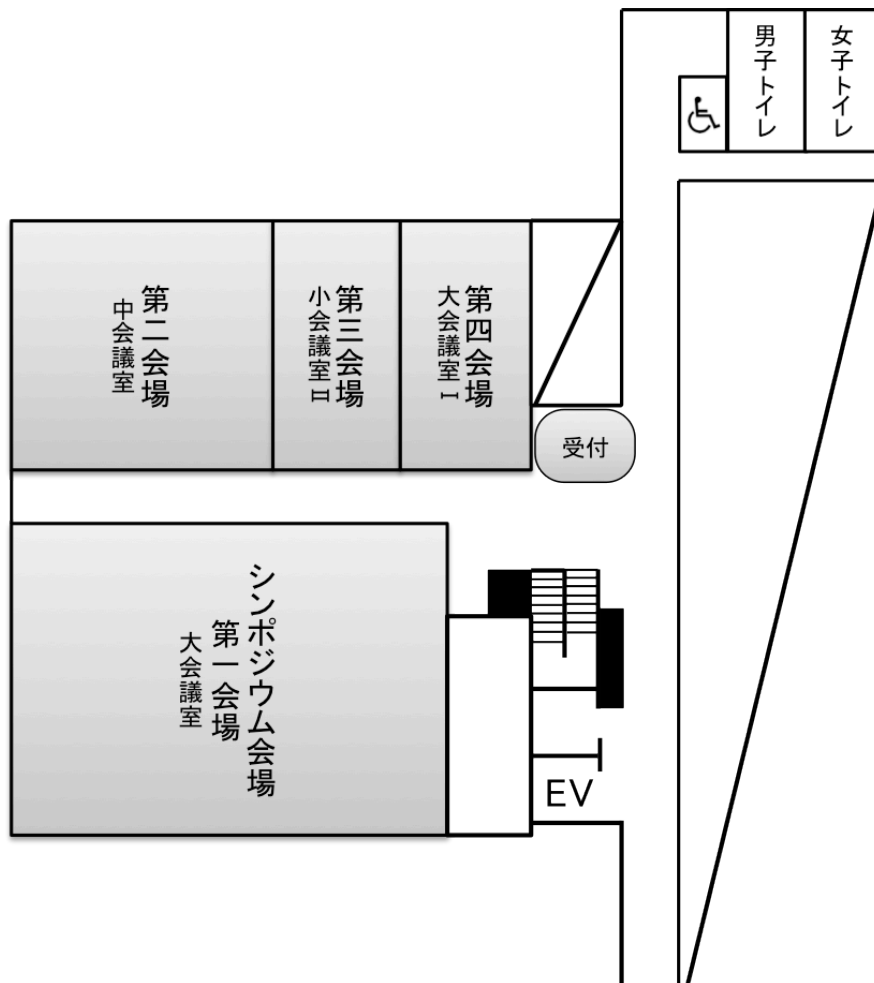
- 朝水宗彦 (比) 産業遺産の再利用と教育を目的とした体験型観光
- 高津義典 (比) 雇用、成長、自然を直視する新文明スタイル
- 服部 泰 (比) シンボリック相互作用理論から考える地域のあり方

10:30-11:30

座長：加藤久典

- 犬塚潤一郎 (比) 社会のメディア的構成と風土性—ふさわしい倫理を持つこと—
- 平松健男 (地) 原発の温排水が日本海表面温度に及ぼす影響

会場案内図



稲盛記念会館 3階

講演

日本語のいのち

山折 哲雄（国際日本文化研究センター元所長・名誉教授）

アイヌ語の「ヤイコシラムスイエ」は「考える」を指す言葉だという。ヤイは「自分自身」のこと、コは「にたいして」、シは「自分の」、ラムは「心」、スイエは「を揺らす」と、それぞれ対応する。こうしてこの言葉は、「自分自身にたいして自分の心を揺らす」となるだろう。アイヌ語の「考える」は頭だけで考えるのではない。それは「心を揺らす」ほどに感動することであり、魂を振動させる、という言葉だったことがわかる。このことは金田一京助の弟子だった言語学者、加里真志保も指摘しており、のちに『苦界浄土』を書いた石牟礼道子の心をも揺り動かしたのだという（本田優子著『二つの風の谷—アイヌコタンでの日々』筑摩書房）。

こんどの3・11の大震災で、大きな被害を受けた岩手県の気仙沼で医師をしている山浦玄嗣という人がいる。東北大学の医学部を出た人だが、ふるさとに帰って医院を開き、そのかわら聖書の研究をはじめた。幼いときからのカトリック信者で、一念発起、独学で聖書の古代ギリシャ語原典から岩手方言の「ケセン語」への翻訳をはじめた。氏は数年前『ケセン語訳新約聖書』なる珍しい書物を刊行していたが、昨年になって『ガリラヤのイエシュ』と題する日本語訳新版を刊行した（ともに大船渡市、イー・ピックス出版）。なぜならこんどのは岩手県の気仙（ケセン）方言だけでなく、日本各地の方言を総動員して、聖書に登場するさまざまな人間たちが語る言葉を再現しようとしているからである。かつてイエスが伝道したガリラヤ地方は、首都エルサレムからは遠く離れた辺境の地だった。その田舎の貧しい百姓大工の子がイエスだったのであり、そのガリラヤ地方ではイエスのことを「イエシュ」と訛って発音しているという。

圧巻はやはり、翻訳の内容である。私があつと虚をつかれたのは、誰でも知っているヨハネ書の冒頭に出現する一節の翻訳だった。これが日本聖書協会『聖書』（新共同訳）では

初めに^{ことば}言があつた

言は神と共にあつた

とあるが、山浦訳ではこうなっている。

初めにあつたの^ア

神さまの思いだつた。

思いが神さまの胸にあつた。

「初めに言ありき」の「言」はたんなる「言葉」なのではない、それは「神さまの思い」なのだという解釈である。いま、われわれの言葉はあまりにも軽くなってはいないか。

シンポジウム

平安—和語の世界

佐々木 瑞枝 (武蔵野大学)

日本語はいくつかの層によって形成されている。まず、Native stratum があり、それらは和語と呼ばれる。wago という語形は中国語の呉音からきたもので、『日本霊異記』(成立は5世紀後半から822年)の上巻28に「倭語」「倭」が出現する。現在使われている「和」もこの中で使われている「倭」も、日本を指す字として使われてきた成立年代から考えて、少なくとも822年には、ワゴという外国語と対立する概念(がいねん)が存在したことになる。人々は「和語」を使って会話し、大事な約束事や社会的なルールも和語によってなされていたのだ。

しかし、当時日本人は文字を持たず、特殊な記憶能力を持った「語部」によって、継承されていた。古詞を奏する部としての正式の召集記録が10世紀初頭の延喜式(平安時代中期に編纂された格式(律令の施行細則)で、三代格式の一つも記されている。

漢語の呉音は、506世紀に長江下流地域の音が日本に伝わったと言われる。当時中国は南北朝時代の南朝で百済経由で日本に入り、その後日本語の中でも遣隋使や遣唐使によってもたらされた漢音と日本語の中で同居している。

例 一行(いちぎょう(呉音)、いっこう(漢音))
人間(ニン 呉音) 人類(ジン 漢音)

漢語は口語としては同音異義語が多く、口で伝えるには不向きであり、口語としては和語が圧倒的に力があり、また漢語が公的な文書として用いられる時代にあっても、和語は『万葉集』、「祝詞」『古事記』、『風土記』などに用いられている。これらの資料には漢字が表音文字として使われてはいるが、和語が使用されている。漢語は一部の知識階級にしか浸透せず、和語がもっぱら庶民のコミュニケーション手段として力を持っていた。

漢語の成立期である奈良時代・平安時代、漢文による記録が「正式なもの」とされたため、和語と漢語の間に以下のような「格差」が生じていき、それは現代語まで引き継がれている。

- 1、漢語は公的であり、和語は私的である(論文は漢語を多用した方が論文らしくなる。役所の文書には漢語が多い、etc.)
- 2、男性は漢語、女性は和語を使用する、(当方、失念して失礼しました。私、すっかり忘れていてすみません)
- 3、漢語は論理的な文章に用いられ、情緒を尊ぶ場合には和語を用いる。

シンポジウム

日本語の易しさと難しさ

鈴木 貞美 (国際日本文化研究センター)

①日本語はやさしい「話し言葉」 何語と比べるかの問題

- ・母音が五つしかない。(母音があいまいな言語もあるが)
- ・語順に決まりがない 「ないですよ、決まりなんて。語順に、日本語の」
- ・用言の活用が少なくなった
- ・助詞のはたらき 格のかわりに 「ない。決まり。語順。日本語」
- ・補助動詞のはたらき—敬語法
- ・日本語は「あいまい」と言われるが。 単数と複数の問題

②日本語はむづかしい「読み書き言葉」

- ・「てにをは」も「敬語」も習得できない。

③日本語は便利

- ・知的表現と感情表現 漢文と和文の使い分け
- ・「習得がむづかしい言語ほど高度な表現ができる」「高度な表現は習得がむづかしい」
- ・二か国語以上を知っている方が複雑な表現ができる

⑤まとめ 仮説の提案

- ・言語ごとに「文法」の考え方がちがうのでは？
- ・ヨーロッパ語は「話し言葉」が基準
- ・中国語もアラビア語も「書き言葉」が基準
- ・「中間言語」の形成
- ・日本語は？ 明治期「言文一致」神話について
- ・「文法」とは何か？ 習慣の規範化 語学の教科書が「文法」
- ・「よろしかったですか？」は、正しい日本語か、正しくないのか？

シンポジウム

『菊と刀』から紛争処理へ

ポーリン ケント (龍谷大学)

第二次世界大戦中とその直後における日本および日本人のイメージは「非人間的かつ好戦的で消滅すべき文明である」というのが主流であった。これは敵対心が激しい戦時中の産物であるが、当時、日本人をもっと正確にとらえようとした研究者がいた。日本でもよく知られている、アメリカの文化人類学者ルース・ベネディクトがその人である。彼女が著した『菊と刀』が、日本人の文化的性格に関する議論を戦後に盛り上げたことは周知のとおりだが、この本が紛争処理のために果たした、もう一つの重要な役割にはあまり注目されてこなかった。

ベネディクトは、文化的コンセプトを各文化の立場から理解する、いわゆる「文化相対主義」の観点から研究を進めていた。つまり、自文化中心主義では他文化を十分に理解できないので、現場の声を重視し、インフォーマントの自文化に対する理解からできる限り吸収し、現場の言葉に含まれる文化的な意味合いを分析結果に反映させるスタイルをとっていた。日本の場合にはその有名な例が「恥」であるが、恥が制裁力として働く責務体制の説明では、恥以外に「恩」「忠」「義務」「義理」「仁」という言葉が日本人にとってどのような概念であり、総合的な責務体制として日本人の行動にどのような影響を及ぼすかを『菊と刀』で丁寧に述べている。

その目的は、日本人の「非人間性」の根深いイメージを崩すことであった。そして、日本人は、特定の文化的パターンをベースに、理屈の通った行動をすると証明することだった。読み手のアメリカ人一般の理屈と異なっても、実は日本人は非常に巧妙な文化的パターンにもとづいて行動する「人間」であることを最終的に示したかったのだ。戦争中、プロパガンダによって、非人間的な日本人のイメージをホワイトハウス上層部でさえ支持し、それにもとづいて日本人すべてを絶滅させる計画さえ検討されていた。

このように、ベネディクトは、到底理解不可能とされていた日本人への偏見を日本語を用いて崩し、日本人の人間性を明らかにすることによって戦時中の戦略と戦後の復興にも影響を与えた。最近の中国における日本ブームでは『菊と刀』がベストセラーになり、新たに文化間のコンフリクトを緩和する役割を果たしているところをみると、まだまだコンフリクト解決の書物としての賞味期限は過ぎていないようである。

シンポジウム

神話と歌にみる言霊思想

鎌田 東二 (京都大学こころの未来研究センター)

2009年7月、真夏のある昼下がり、わたしは大宮の自宅の居間に横たわり稗田阿礼に成り切って「My 古事記」を語り始めました。その日に3時間、翌日にまた3時間、横たわって目をつむったまま思い浮かぶ言葉をひたすら語りつづけました。それをテープ起こししてまとめた本が『超訳 古事記』(ミシマ社、2009年10月刊)です。もちろん多少手直しなどしましたが、ほとんど語ったままを活かして作りました。正味6時間でできた、わたしの出した本の中では最速・最短の本となりました。

鎌田東二が稗田阿礼に成る? そんな阿呆なことが!?

常識も理性も、当然、そのように考えるでしょう。

しかし、しかし、です。本来、「神話」なるものは、そのような何ものかに成るとか、神懸り状態になって語られたものではないでしょうか?

なによりも、神話は口承伝承されてきた物語であり、その起こりは神懸り的な神託だったのではないのでしょうか。古代人はそこに、不可思議で超越的な言葉の霊妙なはたらきを感じ取ったのではないのでしょうか?

「言霊」とは、そのような言葉のくしびなはたらきとちからに対する言語感覚に発する概念ではないでしょうか?

『超訳 古事記』は、そんな、神話的伝承の言い伝えの世界を再現しようとした非常識で無謀なチャレンジでした。稗田阿礼が伝え来た伝承を語り、太安万侶がそれを文字に起こして整序し、最終的にある編纂意図をもってまとめたものが『古事記』だとすれば、その『古事記』の世界の「原古事記」的な「伝承感覚」や「言葉感覚」を探究する試みが『超訳 古事記』でした。わたしが鎌田阿礼となり、編集担当のミシマ社の社長の三島邦弘さんが三島安万侶となって共同作業で作った、実に非常識な本でした。

わたしは、神話やさまざまな伝承には、言葉の霊妙なはたらきとちからに対する言霊的な「感覚」が注入されていると考えます。というよりも、そのような言霊「感覚」なしに、「神話」は「神話」たりえず、「伝承」は「伝承」たりえないのだと思っています。

わたしはこの夏、『古事記ワンダーランド』(角川選書、2012年10月刊)の執筆に専念していました。その真夏の格闘の過程で、『古事記』をイザナミノミコトの負の感情の鎮めに発する「グリーフ・ケア」と「スピリチュアル・ケア」の「歌謡劇」と捉え、そのキー・キャラクターとなるスサノヲノミコトに始まる出雲神話を「怪物退治と歌の発生」という観点から『古事記』の「ワンダー」を覗き見ようと思いました。

「八雲立つ出雲八重垣妻籠みに八重垣作るその八重垣を」

このスサノヲの歌が日本の和歌の濫觴です。

112の歌謡を持つ『古事記』の歌の力を、これほどリアルにパワフルに面白く感じたことはこれまでありませんでした。まさにそれは、『古今和歌集』仮名序に紀貫之が書いた、「和歌は、^{やまとうた}人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける。世の中にある人、^{こと}事・^{わざ}業しげきものなれば、心に思ふ事を、見るもの聞くものにつけて、言ひだせるなり。花に鳴く鶯、水に住むかはづの声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。力をも入れずして^{あめつち}天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女のなかをもやはらげ、^{ものゝけ}猛き武士の心をもなぐさむるは、歌なり。」というちからの感受体験でした。

本日のシンポジウムでは、そのような私的な体験を踏まえて、話題提供できればと思います。

講演

災害の深化と減災の智慧

原田 憲一 (NPO シンクタンク京都自然史研究所・特別研究員)

およそ 2000 万年前までアジア大陸の東縁部をなしていた細長い地体が、日本海の拡大によって太平洋側に移動し、約 1500 万年前に日本列島となった。それ以降、陸上では火山が列をなして噴火し、太平洋岸は巨大地震と津波が周期的に襲うようになった。700 万年前からはヒマラヤ山脈が急激に隆起してインド洋で発生する上昇気流をせき止めて東に流すようになったために毎年梅雨を迎えるようになった。なお、フィリピン沖海域で発生する台風は約 2 億年前からアジア大陸東縁部を北上していた。

こうした自然現象が災害として受け止められるようになったのは、長らく遊動生活を送っていた人間が小規模な環状キャンプをつくって定住生活に入った後期旧石器時代（約 4 万年前）以降のことである。なぜならば、遊動生活期には高台や尾根筋を移動して天変地異を避けていたが、定住後は集落全体が一挙に破壊され多くの仲間が死傷する危険に晒されるようになったからである。

日本では後期旧石器時代の遺跡数が 1 万を超え、10 万を超える縄文遺跡と共に、低湿地にたまった沖積土の下および山麓を覆うローム層や地すべり堆積物の下から発掘されることが多い。この事実は、頻発する洪水や地すべり、火山噴火や火砕流などによって大量の土砂（碎屑物）が運び込まれる危険な場所が意図的に繰返して定住地に選ばれていたことを示している。なぜならば、大地の生産力を支える土（土壌）の主成分は岩石の風化によって生じる碎屑物であり、それが大量に運び込まれる場所は肥沃な土に恵まれているからである

理不尽な災害によって家財や仲間の命を一挙に失う危険に晒されるようになった人間は、平常時には人間に恵みを与える慈母のような存在である神（自然）に、恐ろしい厳父の一面があることを理解して、定住地に住まう神の恵みを最大限に引き出して怒りを最小限に抑えるために、歌舞音曲と供物を捧げる神事を、太陽が二至二分に指し示す聖なる場所で執り行うようになった。

集落の規模が拡大し人口が増大すればするほど災害は深化するので、人々は定住圏における自然の動きを詳細に観察し、災害の度に経験値を蓄積した。そして災害の様子や予兆などを物語（神話）として伝承した。また、危険な地域には危険地名をつけて立入りや土地利用を制限する一方で、安全な場所には神社を設けて「安全な聖地」とし、権力者による私有を禁じ、避難と復興の拠り所とした。こうした減災の智慧は近代土木工事の発展によって忘れ去られたが、東日本大震災の復興にあたって、「災害文化」として再評価すべきであろう。

講演

持続千年首都・平安京の生態智

鎌田 東二 (京都大学こころの未来研究センター)

今年、『古事記』編纂1300年でもありますが、『方丈記』著述800年にも当たり、『古事記』や『方丈記』について、また稗田阿礼や太安万侶や鴨長明(1155~1216)について、さまざま角度からシンポジウムや雑誌などの特集がなされています。『古事記』は神道の生命観である「むすび」のコスモロジーを基軸として成り立っていますが、ほぼ同時期に成立しつつあった『平家物語』とともに『方丈記』には仏教的な「無常」観(感)が表現されているとされています。『方丈記』の著者・鴨長明は、下鴨神社(賀茂御祖神社)摂社の延喜式内社・河合神社の禰宜の息子でしたが、禰宜になれずに世をはかなんで50歳で出家した和歌や琵琶の名手の風流人です。「ゆく河のながれは、絶えずして、しかももとの水にあらず。灘に浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、ひさしく留まりたるためしなし。世中にある人と栖と、又かくのごとし」という有名な『方丈記』の冒頭部分は、単に仏教的な「無常」感ではなく、古事記的・神道的な「むすび」や「修理固成」の思想の変奏であると読み解くことも可能かもしれません。

その『方丈記』には、地震、大火、辻風、遷都、飢饉などの記録が満載されています。その意味で、自然災害を取材した日本で最初の文学とされ、鴨長明にはジャーナリスト的な視点があったとされています。例えば、「又同じころかよ、おびたしく大地震振ること侍りき。そのさま、世の常ならず。山は崩れて河を埋み、海は傾きて陸地をひたせり。土さけて水わきいで、巖われて谷にまろびいる。渚漕ぐ船は浪にたゞよひ、道ゆく馬は足の立ちどをまどはす。都のほとりには、在々所々、堂舎廟塔、ひとつとして全からず。或は崩れ、或は倒れぬ。塵灰立ち上りて、盛りなる煙のごとし。地の動き、家の破るゝ音、雷にことならず。家の中にをれば、忽にひしげなんとす。走り出づれば、地われさく。羽なければ、空をも飛ぶべからず。竜ならばや、雲にも乗らむ。恐れのかなかに恐るべかりけるは、只地震なりけりとこそ覚え侍りしか。かくおびたしく振る事は、しばしにてやみにしかども、そのなごりしばしは絶えず。世の常驚くほどの地震、二三十度振らぬ日はなし」などとその記述は極めて具体的で真に迫っています。

さて、このような自然災害にたびたび見舞われることがあってもなお「平安京」は安定した小宇宙構造を持っていたために、千年を超える首都となったと考えられますが、その「持続千年首都・平安京」には、①水の都(水脈・水量・生態系の豊富さ)、②祈りの都(神社仏閣など祈りと癒しの空間の集中)、③ものづくりの都(高度技術者集団の活躍とネットワーク)、④里山文化の都(居住空間とそこから少し離れた山系とのインタラクティブな活性関係)という特性があったと考えます。そしてそこに息づいている伝承知を、わたしたちは「平安京生態智」と呼びたいと思うのです。「生態智」とは、「自然に対する深く慎ましい畏怖・畏敬の念に基づく、暮らしの中での鋭敏な観察と経験によって練り上げられた、自然と人工との持続可能な創造的バランス維持システムの技法と知恵」です。(参照『平安京のコスモロジー』鎌田東二編、創元社、2010年)

とりわけ、祈りの都としての平安京においては、両賀茂神社や松尾大社や伏見稻荷大社や広隆寺など、賀茂氏や秦氏が担ってきた寺社が重要な意味を持っていますが、同時に、京都盆地のランドマークともなっている比叡山が重要です。また、辻辻のお地藏さんや観音さんなどの小さな祠が大変重要な意味と社会的機能を持っています。そこでの民衆のささやかな祈りや祭りが、社会安定の大きな役割を果たしてきました。前者において、都城建設で大切な世界の座標軸の設定を果たし、後者において庶民の生活文化に潤いと彩りを与えました。

平安京はさまざまな混乱や戦乱や破壊もありましたが、周囲の山並みの野生をうまく里山文化として取り込み、祈りや祭りやものづくりという文化創造都市を形成していきます。その平安京の自然と文化の総体を21世紀の文明モデルの一つとして再考し再指定してみることは未来的な意義があると考えます。本講演では、平安京を都として千年以上にわたり維持してきた物質的基盤(水、食料、燃料、材木、ゴミ問題、ヒトの流れ)と技術的基盤(芸術、技芸、学問)と精神的基盤(宗教、象徴性、呪術性、霊性)を総合的に解明しつつ、東山三十六峰を中心に展開したモノとところとワザの諸相と歴史を掘り起こしつつ、古代、中世、近世、近代という時代の変遷の中で「京」という「都」が発信してきた時代的メッセージと力を、日本最大の「観光都市」から京都議定書を締結した「環境都市」までを包む射程の中で未来的なビジョンとともに解き明かしてみたいと思います。

講演

文明の衰亡と災害

松本 亮三 (東海大学)

中米ユカタン半島の基部にある熱帯森林帯の只中で、西暦紀元前 600 年ごろから神殿等の公共建造物が作られ、天文・暦法、図像表現、建築の面で人類史上特異な足跡を残すことになる文明が成立した。古典期マヤ文明である。しかし、西暦 900 年ごろ、ティカルをはじめとする中心地は次々と放棄された。古典期マヤ文明の崩壊をめぐっては、中心地間の戦争の激化、庶民の反乱、気候変動などさまざまな説が提唱されてきた。近年の湖底コアや深海コアの分析の結果、8 世紀後半から 10 世紀初めにかけて 4 度の干ばつがあったことが分かってきたため、古典期マヤの中心地の放棄は、干ばつと関係する可能性が高くなった。これとともに、マヤ文明の発展の過程で、森林の伐採が進み環境が劣化したことも当然推測される。8 世紀頃の人口密度は 1 km²あたり 200 人まで達していたとも言われる。熱帯森林の環境のもつキャリング・キャパシティーを越えて発達した文明が、干ばつという自然の猛威の前に、脆弱さを曝け出したのだと言えよう。

干ばつによる文明の崩壊は、南米でも起こった。古典期マヤ文明とほぼ同時期に発展した、ペルー北海岸部のモチェ文明は、6 世紀に崩壊を始めるが、氷河の堆積の研究から 562~594 年にかけて干ばつが続いたことが分かっており、砂漠地帯に灌漑網を張り巡らせて、環境を酷使して大文明を築いたモチェは、6 世紀に、南米のみならず全世界を襲った乾燥化の中で滅亡を余儀なくされたのである。

自然災害が文明の変化、衰退、崩壊の、少なくとも一因となったと考えられる例は、旧大陸でも数多くみられる。サハラ砂漠のタッシリ・ナジェールは、乾燥化に伴って人間活動が変化したことを示す古い例である。紀元前 2800~1800 年頃興ったインダス文明の崩壊は、洪水とそれに伴う塩害、あるいは砂漠化に起因すると言われる。1431 年シャム軍の侵攻の前に陥落したアンコール王朝についても、灌漑網を発展させて大人口を養ったが、干ばつで国力を大きく低下させたことが、滅亡の遠因だと考えられるようになってきている。

不慮の大災害が文明に危機を与え、時に崩壊に導くことは歴史上繰り返されてきたことである。多くの場合、それは人間が生活環境に対して抱いた過剰な信頼、あるいは環境は人間の意志で改変し利用できるとする過剰な自信への「しっぺ返し」であったように思われる。我々人類も、人類が築き上げた文明も、自然の過程の一部なのだということを自覚しなければならないだろう。

シンポジウム

ヴェネツィア—水との戦いの歴史 「イタリア」

陣内 秀信(法政大学)

ラグーナ(浅い内海)の水上に誕生し、水と共生する魅力的な都市を築き上げたヴェネツィアだが、その歴史は水との闘いでもあった。アドリア海の奥に位置し、大陸から注ぎ込む多くの川による土砂の堆積と、海の波の力の拮抗のなかで形成されたラグーナの特異な立地条件の上に、この街は形成された。河川によって運び込まれた土砂で河口やラグーナが埋まるのを避けるために、河川の付け替え工事が14世紀以降、しばしば行われた。一方、アドリア海沿いの海岸を波の脅威から守るため、砂の運び出し、木の伐採などの行為を禁止し、砂丘に植樹を行った。水との共生のために大きな努力が払われ続けた。

ところが、18世紀末のヴェネツィア共和国の崩壊とともに、ラグーナの水環境への関心が薄れた。ラグーナの大陸沿いでは、広大な埋立て地が造成され、工業用地も大量に生まれた。ラグーナにはタンカー用の運河が掘削された。この大量の埋立て、運河掘削、地下水汲み上げによる地盤沈下が、満潮時に海水が一気に流入する結果をもたらした。

そもそも、ヴェネツィアが歴史的に冠水(アックア・アルタ)の現象に常に悩まされてきたことを多くの史料が物語る。アフリカからの季節風(シロッコ)によって、波が押し寄せ、潮の干満や気象条件が重なると、アックア・アルタが引き起こされる。歴史的に少しずつ地面をかさ上げしてきたとはいえ、冠水から都市を守るのは難しかった。ヴェネツィア人はこの自然現象を、つい最近まで宿命として受け止めて来た。しかし、1966年の記録的なアックア・アルタをきっかけに、ヴェネツィア救済のための国際的大キャンペーンが展開され、この水の都の保存再生のための様々な活動が開始された。工業地帯での地下水の汲み上げは禁止された。だが、近年の海面上昇も手伝って、アックア・アルタの頻度が増しているのは確かである。そのため、ラグーナと海をつなぐ三つの潮流口に可動式水門を設置し、アックア・アルタからラグーナ全体を守る事業が目下進められている。地面をかさ上げする道路工事も各地で進められ、同時に簡易下水道の設置等も行われる。一方で、近代の開発で失われていたラグーナの自然環境を取り戻すために、湿地を増やす計画が進められている。数百年にわたるヴェネツィアの経験は、水の脅威から守りながらバランスのとれた都市発展を実現する方法について、多くのことを我々に教えてくれるに違いない。

シンポジウム

インド

村瀬 智 (大手前大学)

南アジアは典型的なモンスーン気候に属し、6~7月の南西モンスーンの到来とともに雨季に入り、河川も増水していく。インダス文明の基盤は、夏のモンスーン後に起こるインダス水系の不安定な氾濫に依存した氾濫農耕にあった。そのために動く可耕地と生産規模が、都市の小ささや少なさに反映し、壮大な王宮や王墓を欠くということにもなった。つまり単一の王権の出現を許さなかった社会経済上の制約が氾濫農耕のなかにかくされているのであり、この点が、灌漑農耕にもとづいたシュメール文明と根本的に異なるところである。

もちろん当時も小用水路は建設されていたし、またヴェーダ文献にも溜池や井戸への言及がみられる。仏典のジャータカには、マガダ国の水田が灌漑水路や畦で方形状に区切られ、また堤防で区画されていたことが記されている。前5世紀ころのガンガー中流域にはかなり整備された灌漑水利施設が存在していたようである。古典時代のプラーナ文献には飢饉のきっかけとなる農業への六害として、干害、水害、蝗害、鳥害、鼠害、外国の侵入があげられている。これらへの対策のうち、南アジアでもっとも力が注がれてきたのは、水害よりも干害の防止のための灌漑水利事業であった。

現在に残る古代の主要な灌漑水利工事には、マウリヤ朝時代の前4世紀末に西インドのカーティアーワール半島で河流を堰き止めて建造されたスダールサナ人造湖や、後2世紀ころに南インドのカーヴェーリ川デルタ頂部に建造された低いダム式堰堤がある。以後、14世紀中期のトゥグルク朝のフィーローズ・シャーにより建設された西ヤムナ川用水路をはじめ、19世紀になってイギリスによってパンジャブ州、ウッタール・プラデーシュ州西部、タミル・ナードゥ州などで進められた諸水利工事も、主として灌漑を目的とするもので、洪水調節の機能はもたなかった。

洪水調節のための治水は、1947年のインド・パキスタン分離独立とともに始まるといってよい。インド共和国では、早くも48年にダモダール河谷総合開発が着手された。ダモダール川は、チョタ・ナーグブル高原に発し、東流してコルカタ南方48キロでフーグリ川に合流してベンガル湾に注ぐ。全長541キロでそれほど大きな川ではないが、元来この流域の荒廃はひどく、モンスーン期には激しい土壌流出と大水害が頻発し、「悲劇の川」ともいわれた。このダモダール河谷総合開発は、アメリカ合衆国のテネシー川流域開発公社を見習った計画であり、その主要事業は洪水調節、灌漑、発電用の多目的ダム群の建設であった。

シンポジウム

新中国北京の防災減災政策と社会主義文明 「中国」

秦 兆雄 (神戸市外国語大学)

中華人民共和国が成立してから、社会主義文明国家の象徴となる首都を北京に定め、その繁栄と安定を維持するために、様々な防災減災政策を次々と打ち出してきた。

まず、北京を中心とする北方地域の水不足問題を解消するために、1952年10月30日に毛沢東は大胆な南水北調構想を発表した。それ以来、政府は多くの専門家を集め50年間にわたり調査・研究を行ってきた。その結果、南水北調は長江の上流、中流、下流からそれぞれ取水し、西北地区と華北地区の各地に引水する東線、中央線、西線の3ルートの方案を決定した。2002年12月27日、当時の首相朱鎔基によって着工が宣言され、総投資額は約5,000億元となる。また、1959年から1961年まで「三年自然災害」と呼ばれる天災と人災により全国規模の大飢饉が起きた時、政府は1958年に制定した「戸口制度(戸籍制度)」を用いて、都市、特に首都北京への難民流入及びスラム街の形成を防ぎ、北京のような都市の繁栄と安全を守り抜いたが、農村地域では数千万人の餓死者を出すことになった。なお、「戸口制度」は現在でも都市と農村の二元構造を形成し、「平安北京」の繁栄に重要な機能を果たしている。

しかし、「過保護」される北京市民の防災意識は昔とあまり変わりなく、またほかの都市や農村地域の住民に比べてそれほど高いとは言えない。例えば、伝統的な祝日や婚礼などの喜び事、各種の祝典、縁日などで爆竹が鳴らされる習慣は火災や事故及び環境汚染などにつながるため、政府は1993年の春節から282の都市で爆竹と花火使用の禁止令を出したが、十分実行できなかったため、一部の都市は部分的に禁止令を取り消した。北京市も禁止から12年後の2005年、花火や爆竹の使用を「禁止」から「制限」へと切り替えた。即ち、5環路内が使用制限地区となり、旧暦の大晦日と元日は終日、1月2日から15日は7時から24時まで、花火を上げ爆竹を鳴らしてもよいことになった。

2012年1月23日、北京市で年越しの恒例となっている爆竹や花火のため、大気汚染の原因の一つである直径2.5マイクロメートル以下の微小粒子状物質「PM2.5」の観測濃度が、ピーク時の23日午前1時に1立方メートル当たり1593マイクログラムを記録し、22日午後6時の1立方メートル当たり20マイクログラムと比べて約80倍にも上昇した。但し、爆竹などを使用した後の燃えかすは1423トンに上ったが、昨年より4割以上減少。また、爆竹・花火による火災も前年比7%減の150件、負傷者は前年比35%減の35人だった。

[9:00-9:30]

文化・文明状況の現代への危惧 —今後はどう備えるか—

清水 良衛 (地球システム・倫理学会理事/比較思想学会評議員)

政治経済教育文化環境等、そして国際間の力関係に至るまで、世界的な歴史上、大きな転換期にあることが感ぜられます。一方で科学と技術の革新は際限なく続いています。この時の流れに不健全さを感じつつも、現状をどのような方向に定め、転換していくか、については、一個人には勿論、組織力を次にしてもむずかしい問題です。しかし今日に至った根元を問うのは、また別の課題であり、私にはそれが「言葉の扱い」でありました。

今日に至る状況を日本に限ってみれば、敗戦以来、価値観の混迷を引き継ぐ中で、戦前のものは全て悪いとする社会的風潮が、戦後長く続き、国民の多くもこれに同調、その結果伝統的で固有の日本的善なる資質も、知らぬ間に失って来ました。そこで失った最大のものは「慎しみ」の心であった。と思います。

日本には神代上代の、多分、縄文初期に始まる記憶に雷鳴や稲光り、地震大雨大風など大自然の力への怖れがあり、その力の背後にカミを知ると、畏敬の念を深めていき、その気持ちがその後の四季や島国の環境の中で成長し、祖霊神も加わり、日本の心情からの宗教心に発展していったことが、思われます。そこには、私の呼称で言えば、縄文教が原始神道、そして古神道となり、その後の変遷を経て、仏教と共にある日本人の今日の信仰に至ったことが思われます。この信仰に貫くものが慎しみの心であり、それを支える言葉であるました。古代の人々はあまり言挙げをせず、言霊信仰も深められていきました。

仏教がもたらされ、修験道もでき、儒教の強い影響もあって、やがて武士道精神ができてくると、一方で茶道や華道という「道」の文化も現れます。慎しみの心はこゝでもそれらの支えとなり、これが日常一般の振子舞や言葉の表現に及んで、日本人のその後の生活文化の基盤となっていました。しかし今や、他者との関係で敬語も礼儀も失われつゝあり、そのことが日本の現代を造り出している要因の一つかと思われるのです。

私は日本主義者でも復古主義者でもありませんが、日本的伝統にあった善き「らしさ」を、その心と共に取り戻し、再生していくことが新時代健全化への大切な要素である、と考えていて、その中心にあるのが言葉づかい、と考えます。とは言え、新しい時代への対応には国際地球社会に生きる視野も必要で、特に英語を使うときの Debate 力と国際情報への関心を深めていくことも不可欠だと思います。

[9:30-10:00]

生態系生命と有情生命の比較研究

渋谷 仙吉 (人間自然学研究所)

生命文明の論議がなされ、科学的側面だけからは捉えきれない豊富な内容を含む「生命」の定義、生命観が問題となっている。生物学では生命をもつ生物と、もたない無生物に厳格に区分する。仏教でも一往有情と非情に分けているがその区分はあいまいで環境主体に依存する。有情は環境主体となる可能性を具え、感情も自発的に発現する。山川草木が含まれる非情は一般に環境となり、それだけで自発的に情を発現することはないが、環境主体を物質的に作り、環境主体と共に生態系を形成し生態系生命を形成しているので無生物とは全く異なる。「草木塔の思想とガイア仮説の比較考察」(地球システム倫理学会、No. 6, 2011)で、最近多種類のウイルス発見や地球生命以外の生命タイプの研究が進み、従来の細胞的生命の定義は狭すぎるので拡張して、「環境主体とその環境が、相互依存的にダイナミックな非平衡開放系を形成し維持し、条件により環境主体とその環境は能動性と受動性の機能を逆転して相互作用し形成している生命を生態系生命」と定義した。この生態系生命は、恒常で独存する物に対するアリストテレスの思考原理・同一律(自同律)でなく、仏法の「ものごと(生命)」に対する縁起性を認めると草木山川や地球が非情としての生態系生命を具えていることが肯定できることを示した。

細胞的生命は有情生命で環境主体となる可能性を具えており、環境と相互作用しているので生態系生命であり有情生命の特性を具えるようになる。本稿では、まず生態系生命を有情が環境主体となる有情生態的生命と非情が環境主体となる非情生態的生命に分類する。次に、生態系生命を具体的に研究するために人間生態系を考えると、非情生態的生命も、人間生態系生命の環境となると人間生態系生命に融合され有情生命になること示す。

仏法での非情生命は、自ら情を発現しないが有情の場合または有情生命に縁すると有情生命に転化する可能性を具えていると考えられる。人間生態系では他者、動物も人間の環境となるので、草木、山川等と共に非情とみなされる。この非情生命から有情生命への転化の可能性を、鉄クギを磁石に近づけると磁化する法則のように「物と性質は分離できない物性不二の法則」を立て環境場を導入すると、人間生態系を形成している環境主体(人間)と環境(自然、社会、動植物等)に適応し応用できることを明らかにする。

[10:00-10:30]

近代文明批判としての環境思想

宮嶋 俊一 (東京外国語大学・非常勤講師)

本発表では近代文明批判としての欧米の環境思想の系譜を辿ると同時に、日本の環境思想との比較を目指す。欧米環境思想の生成ではロマン主義の影響が重要である。18C末～19Cの産業革命、人間の自然支配力強大化の反動から自然の全体性や人間と自然との一体性を説くロマン主義思潮が生じた。エマソン、ソローら超越主義者の影響を受けたピンチが森林管理の観点から自然保護に取り組み森林「保全」を目指したのに対しヨセミテ国立公園「保存」を主張したのがミュアで、ここから「保存」派・「保全」派の論争が生じた。功利主義的な「保存」派とロマン主義的な「保全」派の対立はその後にも形を変えて出現し現在でも議論は絶えないが、後者の系譜としてディープ・エコロジー思想が生ずる。1973年、アルネ・ネスは、汚染・資源枯渇に反対するだけの「シャロウ・エコロジー」に代わる「ディープ・エコロジー」を唱え、生命体や人間を相互に関連した全体で捉え、生命圏の中での全生命体平等主義を主張した。また「保存」「保全」を定義し、前者を批判したのがパスモアで、彼は保存論／保全論の対立を自然の中に内在的な価値を認めるか、あるいは自然を人間の利益や幸福を実現するための手段・道具とみるかの対立であるとし、前者を無知と野蛮に導く全体主義として批判したが、この批判に対しテーラーは生命中心主義の立場から、個々の生命・生物を尊重すべきと主張、またレーガンも(一部は乳類の)個々の動物のみに人間同様の生存権を認めるべきと主張したが、いずれも個体主義的な保存論であった。対するキャリコットは生態系に価値を置いたレオポルドの土地倫理を援用し、構成員の生態系への貢献度合いに応じた価値評価という生態系中心主義を唱えた。こうした近代文明批判としての欧米環境思想に対し、日本ではそれらとは異なる環境思想が生じた。江戸時代の初期から山林の保全の必要性を説き、またそれを実践した熊沢蕃山、『自然真営道』において共産主義や農本主義のみならず、現代のエコロジーに通ずる思想を展開した安藤昌益、神道・仏教・儒教などと農業の実践から「報徳」思想を編み出した二宮尊徳、神社の鎮守の森喪失を危惧し神社合祀令反対運動を起こした南方熊楠ら日本の環境思想家は、欧米とは異なる思想背景から独自の環境思想を練上げた。

[10:30-11:00]

共有文明 —ともにたもつ文明のかたち—

濱田 陽 (帝京大学)

発表者は、「共有文明」(=ともにたもつ文明/Commonship Civilization)という観点から、従来のコモンス論を文明論として広い視座からとらえなおすことにより、現代文明の限界を乗り越える文明のかたちを考察したい。

発表では、1 状態(共有性=ともにたもつこと)、2 主体(人間、自然、〈未知なるもの〉の間)、3 方法(分け、合わせる思考・方法の再検討と「共有権」)、4 対象(物質・生物・人間生活の基本に関わるもの)、5 価値(幸福および環境)の五つの論点から共有文明のアウトラインを簡潔に提示する。

1では、現代文明は人間が生み出したものであるにも関わらず、私たちは生まれながらにして、その只中に放り込まれ、自らが望む文明をつくり、また、その創造に参画しているという意識を持ってないという矛盾を直視し、持続可能性から一歩進めた、「共有性」に基づいた文明のあり方を主張する。

2では、アース・デモクラシー(ヴァンダナ・シヴァ)やバイオミミクリー(ジャン・ベニユス)等、人間間の共有の思考から踏み出し、人間と自然の共有へと思考を深める環境運動、テクノロジー思想を参照しつつ、さらに比較宗教学研究に携わる発表者の立場から、人間、自然、〈未知なるもの〉の間の共有の思考の重要性について問題提起を行う。ここで、〈未知なるもの〉とは、人間の感覚、知性、力を越えたある何かをいう。世界の宗教文化伝統は、象徴・言語・儀礼の体系によってこれを表現してきたといえるが、ここでは、「聖なるもの」のような比較宗教学の概念をあえて用いず、予測し得ない自然現象や自然科学が未だ明らかにしていないフロンティアなどをも含める領域ととらえ、共有文明を構成する重要な要素として位置づけることを目指したい。

3では、共有文明において基盤となる占有でなく共有を基礎とした権利のあり方について考察する。それは、ある対象を使用し、収益を上げ、処分する行為にあらかじめ一定の制限をもうける、つまり、その対象に自分以外の他者の権利が及ぶ可能性を認める権利のあり方である。他者を包容する余地をもつという意味で、この「共有権」は包容的権利ともとらえることができる。

4では、共有権の対象となるべき具体的事物(I 物質の基本に関わる知識・技術・産業、II 生物の基本に関わる知識・技術・産業、III 人間生活の基本にかかわるもの)について論じる。

5では、共有文明において重視すべき、イギリスの新経済財団、フランスのCMEPSP等、近年の幸福指標開発の動向と問題点に即しつつ、多くの人々の幸福や環境の保全を願う精神のあり方について、ともにたもつ心としてのCommonshipの観点から論じる。

以上、五つの論点は相互に重なり合うが、発表では、時間上の制約から、新文明のかたちを模索する世界の研究動向と対話しつつ、とくに2の〈未知なるもの〉と3の共有を基礎とした権利のあり方の関わりについて、考察を深めたい。

[11:00-11:30]

地球システムとしての市場金融経済に係わる倫理的考察

平澤 和夫 (白鷗大学)

現代の市場金融経済では巨額の投資マネーが横断的に自由に行き交うようになり、食糧・穀物等もまた金融商品の一環として組み込まれて投機のターゲットになる等、地球システムの一つとしての市場金融経済はその将来が懸念されるようになった。私自身かつてニューヨーク金融市場の現場で金融デリバティブ取引に従事した経験があるが、デリバティブはその本来的な投機性を魅力として市場経済の規模拡大に大きく貢献してきたと言ってよい。その結果、デリバティブは今や世界の金融資産を数倍上回る規模で地球を覆っている。これに対し各種の規制はあるものの、市場金融経済の論理は増々倫理的感覚と乖離する傾向がある。

一方、イスラム金融では実物資産だけを取引対象としている。その倫理性は強く、市場取引の中でも投機性の強い取引は特に排除される。具体的な市場取引を採り上げ、その投機性の強弱を比較し原理の特徴の一部を浮き彫りにしてみる。これを見るとイスラム金融は、世界で一旦、倫理の問題が湧きあがると途端に脚光を浴びるという素質を持っていることが分かりその将来性は侮れないのである。

目下、イスラム金融の市場規模は未だ小さいが、急速に成長拡大中である。このため日欧米の民間金融大手はイスラム金融を前向きに取り込み始め、イスラミック・ウインドがなければ国際金融機関として最早不完全と言われるほどの見方がある。これに対してイスラム金融サイドは、その倫理的規範で他と一線を画するものの、教義の壁を乗り越えて仕組みの工夫を凝らしデリバティブ取引の一部を取り入れる動きも見られる。

欧米型市場経済とイスラム型市場経済は、夫々の固有の文化を背景としているので合同することは無理としても、異なる文化的な固有性を保持しつつ、文明的な共有性を持つ市場経済において相互に作用し夫々の要素を吸収しながら併存して行くというシナリオが予測できる。その場合、倫理性の強いイスラム金融のシステムは欧米型の市場経済拡大の抑止力となって相対的なシェアを拡大して行く可能性がある。同時に伝統的な市場経済もまた新たな地球時代の新しいニーズ、特に倫理的要素を満たす方向に変貌して行く事も想定できる。このように地球システムは倫理性を帯びれば帯びるほど長期的には新しいタイプの国際秩序を産む可能性があることを指摘出来るのである。

[11:30-12:00]

霊性のコモンズ —琉球弧の島嶼文明の可能性—

須藤 義人 (沖縄大学)

島々の人々が神と崇める「自然」の在りようと、共にある生活のエッセンスは、「生態智」という概念に集約できる。それは、自然に対する畏怖の念を持って暮らすことで形成された、自然と人間とが持続可能な関係を維持するための知恵のことである。

宗教学者の鎌田東二氏が提唱した概念であるが、そのような「生態智」を取り戻し、後代に伝えていくことの実践活動に可能性を感じた。島嶼文明の中核あるものは「自然への畏怖・畏敬の念に基づく、自然と人工との持続可能な創造的バランス維持技術・思想・システム」としての「生態智」であると捉えている。本発表では、琉球弧の島々をコモンズ論の視点から研究していくため、「霊性のコモンズ」という概念を設定している。

「霊性」(スピリチュアリティ)に基づいて、島嶼文明における「コモンズ」(公共資源の管理システム)がどう運用されるべきであるか……を、映像民俗学の視点から触れてみたい。

「祭りのある村には未来がある」と言われるが、それは祭りが生態学的循環の結節点として伝承されてきたことによる。沖縄本島南部、久高島、古宇利島、宮古諸島(西原)をフィールドとして、「シマの生態民族誌」の一部を公開したい。

琉球弧における自然と人々のつながりを、「コモンズ」と「霊性」(スピリチュアリティ)の相関関係に着目し、「シマの生態民族誌」として記録してきた。特に、久高島と古宇利島には「神の島」という世界観があり、「霊性」に基づいた祭祀組織と年中行事がある。

既に3年間の取材を終えて、映像資料と民俗資料は集積している。その成果は、「久高島の年中行事Ⅰ」(知念村委託事業)、「久高島の年中行事Ⅱ」(南城市委託事業)、「古宇利島・神々の祈り」(今帰仁村委託)として、「リーフレット付きDVD映像」として地元へと還元するに至った。

この方法を原型として、宮古諸島、奄美諸島、トカラ列島にも援用し、シマに生きる人々の生活と、自然へのアプローチを描きだし、「シマの生態民族誌」を紡ぐにはどうすべきかを模索したい。そのアーカイブスは、「風土臨床論」の構築への第一歩となり、新たな島嶼文明論と生態智の提言へと繋がるであろう。

[13:00-13:30]

企業とスポーツの文明学

澤野 雅彦 (北海学園大学)

「企業」も「スポーツ」も文明の要素である。どんな文明にせよ、その生活圏に活力を得るには、「企業のようなもの」あるいは「スポーツのようなもの」は不可欠であろう。例えば、日本の明治維新を例にすれば、それ以前に、商家という「企業のようなもの」も存在したし、「スポーツのような」相撲の興行も既に存在していた。そこへ、近代的企業すなわち株式会社がもたらされ、近代スポーツが移植され受け入れるのである。これらは、近代科学などとともに、文明や開化の象徴となる。

科学も株式会社も近代スポーツも、すべて18世紀から19世紀にかけて西ヨーロッパで生み出された文明の要素である。逆にいえば、西ヨーロッパ文明あるいはこれを継承したアメリカ文明が、他の文明に対して優越を誇示した原因を形成した要素といえる。

そして、明治維新以降、日本にこれらが文明移転されると、日本文化は、これらそれぞれに対して独特に相互作用を行った。その結果、「経営家族主義」を生みだして国際連盟でその正当性を主張したり、「日本的生産方式」を定式化し一世を風靡したりした。また、外来のスポーツを模して、武道を生み出し、judoをオリンピック種目にまで押し上げた。さらに、企業はスポーツを利用して、「企業スポーツ」を育み、多くのスポーツ選手を生みだして、オリンピックなどの国際舞台で活躍した。

本報告では、比較文明の立場に立って、文明史のなかで「企業」や「スポーツ」を相対化して検討する。とりわけ「企業」と「スポーツ」が、どのような関係を切り結んできたかを課題とする。

いわゆる第2次産業革命、すなわち、19世紀末から20世紀初頭に起こった、石炭から石油へというエネルギー変換に伴って、「企業」は大転換を起こして社会さえも大きく変化させた。この変化に注目し、西ヨーロッパ(特にドイツ)やアメリカ、さらには日本などの「企業」が、「スポーツ」とどう向き合ったかについて比較検討することにする。そして、西ヨーロッパ文明が産み出したオリンピック、アメリカ文明が定式化したプロ・スポーツやスポーツ・ビジネス、そして、これらを受け入れながら日本文明が作り上げた「企業スポーツ」などの文明史的意義を考察することにする。

[13:30-14:00]

日本語のちからと日本哲学

平田 俊博 (山形大学)

日本に哲学がないのは日本語のちからが弱いからだという説に対して、日本語の底力を活用してこなかったからだと反論したい。

[1] 近年の日本語脆弱説を代表するのは、作家の丸谷才一である。「考えるための道具である日本語の性能が低い…このことは在来ほとんど取上げられなかった。」と丸谷は言い、その理由に次の三点を挙げる。①日本語においては生活語と観念語がはなはだしく乖離する。②観念語は、明治期に西洋を真似して作られた国家のための国語であり、支配的な伝達の道具にすぎない。③国民を操作しやすくするために、日本の国語改革は意図的に、日本語を思考の道具として厳密な論理や精細な分析に適するように改良してこなかった。

[2] 丸谷の説は自負するほどには独創的でない。既に和辻哲郎が昭和4年の論文「日本語と哲学の問題」で、もっと丁寧に論じている。和辻によれば日本語には、①「純粹の日本語」である和語(やまと言葉)、②「日本語化した漢語」である伝来の中国漢語(儒教・仏教漢語)、③「新しき日本語」で明治期に新しく造語された欧米語からの翻訳漢語(近代漢語)、の三種がある。中国漢語も近代漢語も「特殊な種として特別の区域に囲い込」まれた「学問的用語」にすぎない。日常の「活きた言葉」である「純粹の日本語」としての和語は「哲学的思索にとって不向きな言語ではない」。それで後年、「日本語をもって思索する哲学者よ、生まれいでよ」という和辻の檄に応じようとしたのが、坂部恵のやまと言葉の哲学であった。だが、和語に立脚する坂部の哲学は情緒的な詩学の論理への適合性を強調するだけで、客観的な近代合理主義の論理に優れる西欧語の哲学との棲み分けを主張するに止まった。

[3] 本発表で私は、日本語の二種の多層性を指摘することで、包括的な日本語の底力を解明したい。第一の多層性は「生活用語としての日本語の七層性」=①根底語：日常話し言葉②基層語：ひらがな文字使用の和語③下層語：儒教漢語④中層語：仏教漢語⑤上層語：近代漢語⑥表層語：カタカナ文字使用の外来語やIT語⑦外層語：外装文字のアルファベット・数字・絵文字等使用。第二の多層性は、「学術用語としての日本語の五層性」=①ひらがな和語②儒教漢語③仏教漢語④近代漢語⑤科学技術情報カタカナ語。

[4] 日本語の二種の多層性が日本語のちからの源泉となり、文明に対するトランス・モダンな視角と地球システム・倫理への指針を与えると私は言いたい。

[14:00-14:30]

「人間の顔を持った技術」はいかにして可能か
—技術の「多義性」とポストモダンの「最適化」に基づく新しい社会技術の提案—

鬼頭 秀一 (東京大学)

1970年代に今までの近代に基づいた技術に代わる、AT(alternative technology, appropriate technology) が盛んに論じられたが、「実体としての AT」は、近代の産業社会の構造を変えることはできず、当初の役割を果たすことはできなかった。

本報告では、「実体としての AT」を求めるのではなく、近代以前の技術の持っていた「多義性」という、社会の中における技術のあり方に注目するとともに、近代の技術において、効率性のもとに切り捨てられてきた、社会的公正、技術の精神的な側面、時間的・空間的集積性、不確実性を取り込み扱うような開放性などという原理を可能にすることができるようなポストモダンの「最適化」の原理を基底に据えるような、新しい関係論に基づく適正技術論を展開する。そして、そのような新たな「人間の顔を持った技術」のひとつの形として、「社会構造創造型社会技術」を提起するとともに、そのひとつの具現された形としての、オンデマンド交通の可能性について論じてみたい。

交通技術を例にとってみたとき、近代以前においては、「道」は、単に人やものを運ぶものとしてだけでなく、人々がそこで出会い、交流する場を提供したし、巡礼のように、人を運ぶ(目的地に行く)ための手段ではなく、それ自身が目的でもあった。技術においてはさまざまな「多義性」が埋め込まれていた。しかし、近代以後において、それぞれの機能が単機能として最適化、効率化されることにより、このような「多義性」は失われていった。そのことにより、交通弱者のような社会的不公正を生み、技術の精神的な側面は失われていった。その多義性に重層的に蓄積されていくような、時間的・空間的集積性というローカルな場に埋め込まれた文化や伝統も省みられることがなくなったし、また、世界に本質的に存在する「不確実性」もシステムの中に自足的に取り込みなきものとするような閉鎖性の中に、「事故」や「安全性」もその中で自足的に解決可能なように、語られていった。その究極の形か原子力技術であり、そのような自足的で閉鎖的な技術はそもそも破滅型の技術であることは、3.11により証明されることになった。

そのような技術とは対極的な、「多義性」を新たに生み出し、社会的不公正を是正し、技術の精神的な価値を復権する、「不確実性」を開放製の中で取り扱うような技術が求められている。そこで、その具体的な形として、ICT 技術を、新しい「最適化」原理のもとに組み換え、使うことによって可能になる、社会構造創造型社会技術をここに提起する。そして、その実例としてのオンデマンド交通を具体的に論じることにより、その新たな可能性と、その構造的な原理について、論じる。

[9:00-19:30]

地域資源を用いた環境調和型社会設立構想

牧 武士 (株洗陽電機)

過去半世紀、先進諸国は、より楽で快適で便利な暮らしこそ人類の進歩と信じ科学技術を駆使して地球の化石燃料と金属資源を大量に利用して様々な工業製品を製造しその恩恵を享受してきた。しかし、21世紀に入ってから地球規模の環境異変が頻発、化石燃料の大量消費による環境容量を超えたCO₂の大量排出が原因と気づき、日本の元首相は2020年までに1990年比25%削減を掲げた。しかし、世の体勢は、未だにこれまでの浮かれた社会に執着、元首相の勇氣ある発言も無視された感じである。地球規模の環境異変、化石燃料の枯渇、そして昨年原発事故等、どれもが国の有り様に関わる政治的課題に見えるが、実は、国民一人ひとりの「生き方」の問題であり、この地球で長く生きるかわいい子や孫に対する「思いやりの深さ」が問われている。

要するに誰もが有限の地球を意識することで既に底を尽き始めた化石燃料を消費する楽で便利で快適な「文明の利器」に「頼らない、使わない生活」を徹底するだけのことである。結論的にはこれまでの枯渇資源を浪費する「環境破壊型産業社会」から再生資源を活用する「環境調和型産業社会」への早急な大転換しかないと確信する。この「環境調和型産業」は、60年前までの日本の基幹産業として長きにわたって根付いていたものであり、究極の資源循環型社会と断言できる。しかし、世の多くの人達は、頭で理解できていてもスローでローテクな自然産業への移行に極めて消極的であり、突破口となる何らかの「きっかけ」が不可欠と考える。

今、日本では大震災による原発事故を機に自然エネルギーが注目されているが、私が席を置く株洗陽電機では、地熱資源が豊富な熊本県小国町の集落で地熱発電事業を進めている。私はこの地熱発電事業を機に集落内の地熱を含む自然資源を活用する「新集落営農」を私の会社の経営陣と小国町に提案したく思考中であるが、以下の事項を提案の柱にしている。

- ① 地域の自然資源（地熱、田や畑、森林、河川）を集落で共同利用
- ② 集落住民全員が、農耕畜産林業などの自然産業に関わり、自然産物の生産活動及び集落の維持運営に等しく参加
- ③ 集落で消費する食料、エネルギー及び水などを完全自給、余剰分は集落内にストックもしくは外販することで集落での非生産物の購入に充当
- ④ 住民全員が自然産業に関わる生産活動に参加し共に知恵と汗を出すことで相互の信頼を深め、介護や福祉も集落内で解決する安心集落の実現

現在、集落での生産物の種類や生産量の検討など具体化に向け検討を進めており、1～2ヶ月内に第一報をまとめ上げる予定である。

[9:30-10:00]

司馬遼太郎の文明観
——アメリカ合衆国の考察をめぐって

高橋 誠一郎 (東海大学)

ソ連軍との戦闘に備えて満州の戦車隊に配属されていた福田定一(司馬遼太郎)は、終戦直前にアメリカ軍との本土決戦のために本州に呼び戻されて九十九里浜で敗戦を迎えた。その時に「むかしは、たとえば明治時代は、あるいは江戸時代は、さらにそれ以前は、こんなバカなことをする国ではなかったにちがいない」と考えた福田は、司馬遼太郎というペンネームで多くの歴史小説をとおして、「日本という国の原形」に鋭く迫った。

それとともに司馬は、自分の生命を奪うはずだったロシア帝国の「原形と歴史」についても、日露戦争をクライマックスとした『坂の上の雲』(1968-72)や、『ロシアについて——北方の原形』(1982)などで考察し、「富国強兵」と「農奴制」の関連にも鋭く迫っていた。

しかも、アメリカ合衆国の「原形や歴史」にもきわめて強い関心を抱いていた司馬は、ペリー艦隊の来航によってもたらされた幕末の激動の時期を描いた『竜馬がゆく』(1962-66)では、イギリスからの独立戦争を勝利に導いたアメリカのワシントン大統領についての中岡慎太郎や西郷隆盛の高い評価を紹介しながら、新しい時代を切り開いた坂本龍馬の広い視野を明らかにしていた。

さらに、『坂の上の雲』においても新渡戸稲造の"BUSHIDO, THE SOUL OF JAPAN"についての言葉を紹介しつつ、日露戦争の和平交渉の仲介者として果たしたルーズベルト大統領の役割を高く評価した司馬は、その一方で米西戦争などの考察をとおしてアメリカの「遅まきの帝国主義国」としての側面や、原爆投下の倫理的な責任についても詳しく言及していたのである。

そして、1986年に書いた『アメリカ素描』の「あとがき」で司馬は、「私はこの種の——文明と文化についての——ことを四つ書いたと思っている」とし、『長安から北京へ』、『人間の集団について』、『街道をゆく——南蛮のみち』などとともにこの書物を挙げている。

本発表では、梅棹忠夫編著の『日本の未来へ——司馬遼太郎との対話』だけでなく、高坂正堯著『文明が衰亡するとき』をも踏まえて、司馬遼太郎のアメリカ観とその特徴を明らかにし、「フクシマ」以降の文明のあり方についても考察したい。

[10:00-10:30]

逢坂元吉郎の公会主義

寺尾 寿芳 (南山宗教文化研究所)

逢坂元吉郎は日本を代表する哲学者西田幾多郎の最初期における親しい弟子であり、かつ、東西両教会を独自の視点から統合しようとした牧師であり神学思想家であった。逢坂の巨視的な観点からの知的営為は忘れられた「もう一つの〈近代の超克〉」ともいえる。

罪悪感を強調する十字架中心主義によって主観に流れたプロテスタント教会と、伝統の名の下に官僚的教会組織や教皇制といった西洋史的特殊性に固執するカトリック教会の双方を、逢坂はキリスト教の西洋史的束縛から自由な日本において統合しようとする。そこには恩師西田の哲学に共感しつつ古代教父研究を推し進めるなかで到達した主体論によって理論構築に邁進する優れた思想家としての顔がある。注目すべきは、この巨大な視圏をもつ実験的営為の核心は意外にも極小の実体であるキリストの神秘体つまり聖体であったことである。この聖体への徹底的依拠により逢坂の思想は、「最大の事業を最小の根拠で遂行する」というまさに地球的危機に対応する逆説的機微を描写している。

しかしこの逢坂の営みはたんなる観念遊戯ではなく、そこには教父研究を共有する少数ながら同じ目標を共有できる同士とともに実践活動に従事しようという志が見て取れる。この志向性を支えた最も重要な原動力は、当時のキリスト教諸教会が国策に迎合する形で推し進めていた合同教会論つまり日本基督教団成立に対する逢坂の根源的批判がある。プロテスタント教会とカトリック教会を止揚超克した独一無比の「カトリカ」なる視点から逢坂は、いわば「悪しき〈近代の超克〉」ともいえる圧倒的な合同教会論に対抗する形で公会主義を唱え、さらには挫折したものの、宗教運動としての成就を目指した。

こうした逢坂の公会主義は、近代日本のナショナリズムに沿った官製合同教会をたんに普遍的救済観から批判しただけのものではなく、東西文明の衝突を克服しようとする京都学派の思想的苦闘に比肩するキリスト教側からの文明論的試考とも解しうる。その意味で、キリスト教的普遍主義の視点に立って著名な「近代の超克」論議(1942年)に参加しながらも西洋中世の特殊的限界を結局抜け出せず、思想的にも実践的にも限られた影響力を発揮したに留った吉満義彦を補完し、さらには超え行く次元を垣間見せてくれる。中断を余儀なくされたものの、「最小から最大を撃ち、最大を包み超える」逢坂は古くて新しい文明論者たりえるのである。

[10:30-11:00]

現代諸問題に対する廣池千九郎の先見

岡田 宙子 (モラロジー専攻塾)

法学博士廣池千九郎(1866~1938)は、その著書『道徳科学の論文』において、道徳の進化によって人類の安心・平和・幸福は飛躍的に向上したこと、文明の進歩に従って道徳は質的に進歩してきていること、そして何をもって善の標準とするか、どのようにして自己の道徳的標準を高め、行動するかを提示している。

人類の進化に伴って発達してきた道徳から、そして世界の聖人の事績からその一貫性を見出し、それを学問的に体系立てた。それは、人類社会や文化を構成する基本的精神、つまりは道徳であり、道徳の本質を通じて森羅万象みな連絡・連結し、万物相互に助け合い、それが現世界を生きる存在だけのヨコのつながりのみならず、タテのつながりとして「伝統の原理」を含んだ廣池の相互扶助論(Interconnectedness)を展開する。そしてそこには、目に見えないつながりとしてあらゆる存在の痛みや弱さや醜さをも受容する、潜在意識における全人格的・共鳴的受容、つまりは精神的によりよく豊かに生きるためにホリスティックなアプローチの必要性も述べている。

また廣池は、自身の道徳研究を「知徳一体」の学問として追及し、人類の意識と行動の改革の必要性について述べている。廣池は地球環境問題などの現代的な諸問題については、時代的なこともあり、直接的に言及していないが、あらゆる問題に当てはめて考えてみると、地球環境問題をはじめ、本質的なところを指摘している。あらゆる問題の根本は、心使いの問題であり、倫理・道徳の問題なのである。地球環境問題も根本は道徳問題なのだ。問題の解決にあたっては、人の心を動かし、世界を動かし、今ある状況を全体的に長期的にとらえ、周囲を巻き込んでより善い方向へ進んでいく人材が求められる。そのために重要なのは道徳教育であり、特に今後も必要とされるのは、道徳的な行動を累積し、全人格的に感化を及ぼすことのできる人材の育成である。

現在を生きている人々の義務とは、未来の人々の権利も含めて考えていくことがどのような問題に向かい合う場合にも必要となる。極めて長期的な視点がなくては、一時的には成功しても、長期的視点からは、失敗や徒労に終わる。そのためには、道徳的に正しい精神をつくること、そして普遍的な善の標準に従った意識と行為が必要である。

今回の研究では、廣池千九郎の道徳思想から、現代における諸問題に対する、個々人の根本的な精神作用の改革の必要性を考察する。つまりは、道徳教育と道徳実行の必要性と可能性を明らかにすることを主な目的とする。

[11:00-11:30]

古代日本海沿岸の祭祀儀礼に関する一考察 —牛と赤織絹—

阪口 有美子 (龍谷大学)

『日本書紀』の崇神天皇六十五年七月条、垂仁天皇二年是歳条に蘇那曷叱知、同条一云に都怒我阿羅斯等の伝承がある。同一人物と考えるが、朝鮮半島との関わりを記す伝承である。蘇那曷叱知の伝承は短いものであるが、都怒我阿羅斯等の伝承の内容は、①都怒我阿羅斯等は額に角が生えている。②敦賀の地名由来③オホカラ国の王子のツヌガアラシトで別名をウシチアリシチカンキという。④3年滞在後、赤織絹を給い本国に帰す。⑤任那の由来⑥新羅人が兵を起して赤絹を奪い、二国の相怨む由来となる。

さらに一云に①ツヌガアラシトが本国にいる時、農具を背負わせた牛が突然いなくなる。②牛は村人に食べられ、その代償に白石を得る。③白石は美麗乙女となり日本へ渡り難波と豊国のヒメコソの神となる。

と、9項目に分けられる。詳細は異なるが、赤織絹を新羅人に奪われるのは蘇那曷叱知伝承にも共通している。ここでは、都怒我阿羅斯等に係わる牛と赤織絹について論じたい。

牛については角杯について考察する。角杯は古くはスキタイを中心とする騎馬遊牧民たちが残した金属製器物として知られるが、新疆ウイグル自治区且末県托格拉克勒克郷紮滾魯克村一号墓からは実際の牛角から造られた春秋～漢代の角杯の出土例があり、前漢末の洛陽老城地区 61 号墓に描かれた「鴻門の会」の一場面に角杯を持つ項羽とみられる人物が描かれている。この二例より中国でも角杯を用いてきたことが推察できる。また、朝鮮半島では三国時代の慶州地域を中心に洛東江東岸地域から出土した陶質土器の中に角杯型のものが多い。日本では、能登、加賀、若狭、丹後に角杯型容器の出土例があり、日本海を挟んで朝鮮半島と北陸のかかわりが推察できる。

赤織絹については『三国遺事』の駕洛国記に首露王の妃が赤色の帆を掛け、赤い旗をひるがえした船に乗って来たという説話がある。また、石川県七尾市久麻加夫都阿良加志比古神社のお熊甲祭では巨大な赤い旗を用いる。この例から、古代における日本海を挟んだ朝鮮半島と北陸地方で、赤い布に意味を持つ共通した祭祀があったのではないかと推察する。

[11:30-12:00]

戦後沖縄の音楽活動にみるウチナーンチュの社会意識

照屋 ナツキ (京都市立芸術大学大学院)

本発表の目的は、第2次世界大戦後、現在までの沖縄において、それぞれの時代に特徴的であった音楽を取り上げ、それらの音楽に込められてきた沖縄の人々の思いを明らかにすることである。終戦後アメリカ占領下におかれた沖縄は「日本復帰」に、基地問題からの解放を夢見ていたが、復帰後40年を経た今日でも、依然として基地をめぐる様々な問題は山積し、観光に伴う環境破壊も大きな問題となっている。

沖縄において、音楽は以下のような時代を経てきた。

- 1) 1945～1958 :
 - ・民謡のSPレコードの全盛期
 - ・ラジオ開局
- 2) 1959～1971 :
 - ・「民謡レーベル」の隆盛期(新作民謡と音楽産業の発展)
 - ・「沖縄フォーク村」(1971)の結成とその活動
 - ・「オキナワン・ロック」の成長期
- 3) 1972～1982 :
 - ・復帰に伴う、日本本土への発信
 - ・「沖縄ポップ」の台頭
- 4) 1983～1989 :
 - ・「沖縄ポップ」の模索
- 5) 1990～1999 :
 - ・全国的な「沖縄ポップ」の隆盛
 - ・「しまうた」の確立
- 6) 2000～2012 :
 - ・「インディーズ・レーベル」の発達

終戦後、アメリカの統治下にあった沖縄の音楽は、米軍の文化政策のもと、芸能団体が結成され、米軍や地元住民の慰問活動が行われていた。それと同時に、沖縄の音楽は、アメリカ文化との接触により、ジャズやロックの影響を受けることとなった。その後、民謡レーベルが発達し、新作民謡と言われる新しい民謡や、様々な音楽が生み出されていった。1960年代に入ると、「沖縄県祖国復帰協議会(復帰協)」が結成され、ベトナム戦争の影響を受けた沖縄では、反戦・反基地感情がさらに強まっていった。そうした状況下で、社会の変化を歌い込み、反戦を主張するような作品が数多く作られるようになった。1971年には「沖縄フォーク村」が結成され、本土のフォーク・ソング運動と呼応しながら、沖縄方言や古くからの民謡を用いた音楽表現を生み出した。1972年に日本に復帰を果たしてからは、県内だけではなく、日本本土への音楽発信も盛んになっていった。この発表では特に、日本本土との接触により、沖縄音楽が移り変わっていった終戦直後～1972年に焦点を当て、どのようなメッセージ性を発信し、沖縄の思いを表現してきたかについて発表する。

[13:00-13:30]

「3・11」を日本の“ノー電気デー”に
— 人類存続のキーワードは“自制” —

小山 芳郎 (ジャーナリスト元NHKプロデューサー)

今、改めて言いたい。2011年3月11日、東日本を襲ったマグニチュード9の大規模地震、40メートルにも達した大津波、レベル7という最悪の原発事故。この天災・人災の複合災害は、人類史上初めての大惨事であったということ。

この大惨事は、大自然の脅威への人間の認識の甘さと科学技術への過信を露呈するとともに、暗黙知による安心・安全神話を打ち砕き、多くの専門家、科学者に敗北感をもたらした。さらに危惧するのは、この年の10月、地球が養える限界とも言われてきた人口70億人を超過してしまったことである。

文明災とも構造災ともいわれる「3・11」と「地球人口70億人突破」は、地球上の人類の行方に大きな課題を突きつけたのである。このことを教訓として、有限の地球上での人類のあり方を考えなければならない。そこで、3月11日を日本の“ノー電気デー”の休日として、子どもから大人まで全ての日本人が家庭で「人間・地球・自然・文明」を考え、話し合う日とすることを提言したい。年に一度、生命に関わる医療機関などの一部の例外を除いて、全ての電気をストップ。テレビもパソコンもケータイもやめ、現代文明を代表する電気が日本に登場する以前の、百数十年以前の江戸時代の暮らしに思いをはせながら、20世紀の科学技術の進歩とともに享受してきた成長と繁栄、生活の便利さ、快適さなどのプラス面と、それと引き換えに失った多くのマイナス面などを語り合い、「真に幸せな生活とは何か」やエネルギー、環境問題などの意見集約の国民運動にしたい。民主的な国民投票的なものに発展していけば、政治家や官僚、学者、マスコミなどの専門家に任せきりにしない、日本人の世論を代表するものとなろう。人類存続のためには、“連帯”“共生”を旨としながら、自己犠牲も伴う“自制”の精神を世界各国が共有、実践しなければ人類に未来はないと思うからである。東西文明のそれぞれのいいとこどりをし、“和”の精神と“儉約”、“我慢”や“質素”を美徳としてきた日本。“自制”を形で考える「ノー電気デー」の日本モデルを世界に示そう。やがてアメリカも中国も世界各国が、年に一度、「ノー電気デー」を実施するとき、初めて地球市民としての意識が世界に徹底され、持続可能な地球となることだろう。暗闇の中に、今まで見えなかったものが見えてくるに違いない。

[13:30-14:00]

頼母子講という自発的小集団の「創発」から捉えた内発的發展 —宮崎県綾町の事例から—

岩佐 礼子 (東京大学大学院)

宮崎県綾町は1965年に全国に先駆けて区長制が廃止され、住民自治強化のために自治公民館制度に一本化されたことで知られ、その後照葉樹林保護や自然生態系農業の推進などの地域の自然資源を生かした施策が実行されており、保母(1996)や池田(2006)によって内発的發展のモデルとしても捉えられている。本研究発表は、綾町に多く存在している講集団の果たす社会的機能に着目し、その内実をポランニー(1983=2003)の創発概念でひもとく、鶴見和子(1989)の内発的發展論に結びつけることを試みる。

古くは平安時代の仏教集団に端を発する講の仕組みは、以来長い歴史を経て継承され、現在も多くの講集団が全国各地に存在している。綾町では、祭祀行事を実践する伝統的講集団はもとより、回轉信用組合から親睦会に転じた頼母子講も多く存在し、活発に活動している。

綾町の頼母子講の特徴は、伝統的な講の仕組みを継承しながらも、戦後から近年にかけて形成された、対等な人間関係を保持する現代的集団であり、自治公民館の役員会や中学校の同窓、PTAの父兄会など既存の組織や活動から派生した構成員から成っている。毎月定期的に親睦会を持つといった講の趣旨から一見単なる娯楽集団として見られがちだが、その内実をより詳細に見ていくと、頼母子講という場から発生するコミュニケーションと情報交換が、構成員間の自発的な「相互扶助」の実践に直結し、住民自治に寄与する「信頼」といった倫理的価値観を熟成することが明らかになってきた。この講を社会関係資本として分析することは自明だが、ここではマイケル・ポランニーの「創発」の概念に依拠し、制度的組織(例えば自治公民館)から内発的に創発した一段階上の次元の社会發展の現象であると仮説を立てる。

この頼母子講は暗黙的に規範を共有し、自然環境変動(災害など)や社会変化(失業など)に応じて柔軟にその目的や機能を変化させる(例えば労働交換機能や回轉信用組合など)潜在可能性を秘めた新しい包括的存在と捉えられる。さらに頼母子講は構成員の家族と派生元の組織活動をも支えているが、その逆は起こらない。頼母子講は、現行政府が謳う、官依存ではない民による公共サービスをめざす「新しい公共」といった、上から強制された自治とは異なり、自発的でより持続可能な草の根の自治組織である。この意味で頼母子講は内発的發展に欠かせない伝統の再創造(鶴見1989)の一例を示しているといえる。

[14:00-14:30]

文明と調和を考える —比較文明学会第31回大会の開催に向けて—

横山 玲子 (東海大学)

20世紀が終わるころ、ユネスコなど多く国際機関や有識者たちが、第一次・第二次世界大戦を経験した「戦争の世紀」振り返りながら、さまざまな民族や国家が互いに「対話」を行うことで新たな未来を切り開こうと語りかけた。しかし、21世紀を迎えた今も世界各地で争いが絶えず、世界規模での経済的な閉塞感に包まれている。有史以来、人類は世界各地で何度も悲惨な経験を積んできたはずだが、その経験は活かされてきたのだろうか。本質的に変わらない、あるいは変わることのできない私たち人類の「生きる」という営みの中には、大きな、そして根本的な問題があるように思われる。

争いの原因として、宗教が語られる時、経済が語られる時、政治が語られる時、実は、それらが互いに絡み合っていることを知りながら、その時々においては、いずれかの局面のみに特化して打開策を考え、解決の糸口を探してきた。そのためであろう、どの解決策も根本的な解決には繋がらず、必ず何らかの「しこり」を残してきた。言いかえれば、残されたいくつもの「しこり」が、また新たな争いの火種としていつでもくすぶり続けてきたのである。いったい人類は、何を求めてきたのだろうか。

2013年秋に予定されている比較文明学会第31回大会は、「調和」をキーワードとして開催する。対話に必要なのは、私たち人類のもつ「寛容」の心であり、さまざまな価値観を互いに認め合った上での「融和」であろう。「対話」はそのための手段である。さらに言えば、「寛容」も「融和」も「調和のとれた状態」を思い描くからこそ、生まれてくるものではないだろうか。広い意味での「文明」は、人間社会と自然との不可分な関係性の中で捉えるべきであろう。20世紀半ばに表舞台に登場してきた「生態系」という概念の必要性を改めて考え直すことが肝要だろう。人類もまた、地球という空間の中に生息する「生命」のひとつにすぎないからである。

調和のとれた文明のあり方は、ただ単に人類の営みだけに限定して語られるのではなく、同時に、人類が自然に対してどのように接してきたのかということだけで語られるべき事柄でもない。人類もまた、他の生物と同じく自然の一部に過ぎないのであれば、私たち人類が自然に対してどのように接し、あるいは対峙してきたのかということだけではなく、自然の中で私たち人類はどのような位置付けをもっているのかということも考えなければならない。「エコ」ということばが世界的に使われるようになって久しい。しかし、本当に考えなくてはならないのは、「地球に優しい」という人類社会のあり方ではなく、地球そのものの歴史における人類社会のあり方であり、人類の営みが人類社会の内と外にどのように影響を与えているのか、ということであろう。内に対しても、外に対してもバランスを欠いた、言いかえれば「調和」を欠いた状態に対して無頓着であり続けてきた私たちの営みそのものに、目を向けて考えてみたい。

[9:00-9:30]

人類普遍の叡智から地球システム・倫理を創造

斉藤 大法 (地球システム倫理学会会員)

今日我々は、急速な地球環境破壊、急激な人口増、資源の涸渇、貧富の格差増大・飢餓人口の増加、共同体の崩壊、戦争状態の存在など、人類史上未曾有の難題に対峙しております。

これに対して、国連の諸機関をはじめ各国関係者や NGO などによる様々な取り決めや行動がなされているものの、残念ながら未だ解決の明快な道筋が示されるに至っておりません。

その最大の原因は、人類のあらゆる営みに多大な影響を与えている近代の経済至上主義、グローバル化とその快適さに浴して省みられない先進国を始めとする多くの人類の生活の価値観ならびにそのスタイルです。また、上記の危機的状況を知りながらも世界全体としての有効な対処を阻んでいる国益最優先主義にあります。

私は、この憂うべき閉塞状態を克服してゆくためには、人々が共通して抱えている根源的願いとしての幸福という観点に立ち返り、そのことを深く掘り下げて考察するところからはじめべきだと考えます。

人は皆幸せになりたいと思っています。しかし、幸せの求め方の違いがあります。これまでの経済成長至上主義のような求め方では、富・名声・権力といった外的な目標にもっぱら力を注いでゆくこととなります。これは、自分の意のままにならない外部への依存が高まり他の人との間の競争や緊張(ストレス)を生み出す、つまり平和や幸せとはかけ離れたものに結果せざるを得ないと言えます。

幸せに生きるための人類普遍の叡智を深く学ぶことにより、現代科学や経済を真に使いこなす、自在で創造的な精神を顕し出し、自身そして社会・動植物・自然環境を大切にす安心と安全の未来の生活や社会経済・地球システムを創造することが肝要であると考えます。

[9:30-10:00]

封建主義に関する比較文明論的考察

林 正博 (東京都市大学 知識工学部)

「封建主義その論理と情熱」は1980年代に書かれた思想書である。一見、奇をてらって書かれた印象を与えるかもしれないが、著者である呉智英の真面目さと思慮の深さは並々ならぬものがある。彼は、その独自の着眼点と緻密な考察により、民主主義以前の封建時代の理念が既に過去の遺物となったとするのは、誤りであり、むしろポスト民主主義として新たな未来を切り開く切り札となると説き、「封建主義の夜明けは近い」と主張する。

呉智英の主張は興味深いが、彼の主張は文明の観点が希薄である。封建と言っても、西欧の封建、日本の封建、中国の封建など、文明による違いがあるが、彼は、特に中国の、しかも、必ずしも封建的とは言えない儒教思想（彼は、地方分権は封建主義の特徴であると著作の中で述べているが、儒教思想は中央集権的な中国伝統社会のイデオロギーであるのだから、儒教思想を封建主義の中心することには疑問が残る。）をその中心概念に据えている。つまり、各文明と封建との関係に関する考察不足が、封建主義に対する正しい理解を妨げている傾向は否めない。

そこで、本研究では、封建主義の理解を深める新たな切り口として、文明をキーワードとした、すなわち、比較文明論的な観点から封建主義を捉え直す試みを行う。

まず、比較文明論の大御所であるトインビーの思想の基本を形作っている、文明は誕生、成長、挫折、解体のプロセスをたどるという主張に着目する。次にこのプロセスの中で、封建という言葉が、文明が挫折し、次の文明に交代してから、その文明が十分成長する直前までの状況を表すのに相応しいことを指摘する。

例えば、西欧の封建時代は、ギリシャ・ローマ文明が挫折し、ゲルマン民族大移動後、西欧文明が成長し始める時期に確立し、十分成長した近代に至って消滅している。

これを踏まえれば、「封建主義の夜明けは近い」という主張は、現在、地球を覆っている文明が、既に挫折の時期を迎え、新たに次の文明が始まりつつあるという主張に他ならない。

封建主義をこのように理解することは、封建主義に対する、より正確な理解を得るとともに、比較文明論の分野においても大きなインパクトを与える。何故ならば、トインビー等、初期の比較文明論者の主張していた文明のサイクル論が、より現実的な未来予測に結び付く可能性を示しているからである。

参考文献

呉智英、「封建主義その論理と情熱」、情報センター出版局、1981年。

[10:00-10:30]

近代的自我の変容とその暴走 —アメリカ文学の場合—

吉崎 泰博 (北九州市立大学名誉教授)

今日の地球的危機の一因は近代的自我の暴走である。近代的自我は科学技術の進歩や民主主義発展の要因であったが、今日ではその暴走が危機を招いている。本発表では世界を動かしている大国アメリカの文学史の中に近代的自我の変容過程を追い、その暴走の実態をみていきたい。

近代的自我を「自己認識を他からの押し付けではなく自分で選び取る意思」と定義すれば、自分で信仰を選び取ったピューリタンたちは自我を持つ近代人であった。彼らは人間の限界を知り、ゴッドの愛に向き合って生きた。社会的成功者のフランクリンも『自叙伝』で「ゴッドの前で正しい人間として生きる」ために社会貢献に尽力したと述懐しており、自己実現を極めた彼の近代的自我もゴッドの前で謙虚な存在であった。

その後ロマンティシズムの自然観が広がると、人は自然=ゴッドの一部であるが故にゴッドと同質だとエマスン等が主張し、近代的自我の自己認識は大きく変質する。エマスンは自己信頼を強調し、ホイットマンも「わたし自身の歌」を高らかに歌った。

19世紀末から20世紀にかけて自然主義文学が広く読まれたのは、資本主義における生産や管理システムの非人間的側面、一部に流行した生物学的決定論などの影響で人々が自信を喪失し、近代的自我が自己否定に向かったことを示している。晩年のトウェインは人間の存在そのものに絶望している。

第1次世界大戦終了後はヘミングウェイ、フォークナー、スタインベックなどが登場し、不屈の精神力、忍耐力、行動力などを描き、好評を博した。この人間賛歌は、人が信頼できるのは自己のみだという意味でもあり、近代人の自己完結的な自己実現、すなわち自己中心的な自己実現を是認している。

その後、自我の迷走や暴走が顕著になる。自己目的化した自我はアイデンティティを求めて多様な方向に展開し、一般庶民の多くは消費文化の浸透により利己的な欲望の充足に向かう。それは自我の暴走であり、アップダイクやマキナーがそのような社会状況を的確に描写した。

今日、利己的な近代的自我の集合体が経済界や政界などを支配し、グローバル化を経て経済社会システム全体を危険にさらしているのである。

[10:30-11:00]

自然的環境から近代技術的環境へ —ジョルジュ・フリードマンとヴェルナー・ゾンバルトを手掛かりに—

秋丸 知貴 (株式会社せいざん会)

技術的発達とは、環境と人間をどのように変化させたのだろうか？

本発表は、この問題について、ジョルジュ・フリードマンとヴェルナー・ゾンバルトの先行研究を手掛かりに考察する。

まず、ジョルジュ・フリードマンは『人間と技術についての七つの研究』(1966年)等で、産業革命の前後を区分する概念として「自然的環境」と「技術的環境」を提唱した。つまり、産業革命以前の「自然的環境」では、全てが自然に基づいており、動力は天然自然力に依存し、技術は主に肉体の延長としての道具を用い、人間と外界の関係は直接的で現存的である。一方、産業革命以後の「技術的環境」では、自然に対する人工の割合が複雑に増加し、動力は蒸気・内燃・電気・原子力等の脱天然エネルギーを多用し、技術は主に肉体から独立した機械を駆使し、人間と外界の関係は間接的で疎外的である。

フリードマンは、こうした環境変化はイデオロギーとは無関係な技術的過程なので、例えば資本主義においても共産主義においても同様に生起すると指摘した。そして、そうした環境変化がもたらす刺激は、人間の心性も生来の生命的なものから脱自然的な合理的なものへ変容させると主張した。

フリードマンは、この「自然的環境」から「技術的環境」への移行の原因を、自然に対する人工の量的増加による質的变化と見る。しかし、この分節の不十分な概念規定では、フリードマン自身が強調するこの環境変化の画期的革命性を十分に定義できない。

これに対し、ヴェルナー・ゾンバルトは『技術の馴致』(1935年)等で、古来の技術とは質的に異なる「近代技術」の性格を、「有機的自然の限界からの解放」と定義した。すなわち、「近代技術」の近代性は、従来の技術に、十七世紀のいわゆる「科学革命」後の近代科学を結合し、観念的・論理的にではなく実在的・物理的に「有機的自然の限界からの解放」を実現することを意味する。

このゾンバルトの質的变化としての「有機的自然の限界からの解放」を、フリードマンの技術の量的増加による質的变化という見解に代入すれば、「技術的環境」をより正確に「近代技術的環境」と再定義できる。

既に今日私達を取り囲む「近代技術的環境」は天然的自然とは質的に異なり、そこで生活を営む私達の心性もまた生来的自然からは大きく変容している。このことを明確に認識することは、あらゆる心理学的・社会学的・文明学的考察の基盤として重要な意義を持つだろう。

[11:00-10:30]

龍の起源と自然観 —中国古代文明を中心に—

汪 義翔(東京理科大学)

中国人は古くから龍を信仰し続け、自分たちが「龍の伝人・龍の子孫」であると自負している。今日に至るまで、龍は世界各地での中国血統のつながりを確認する唯一の共同文化的象徴としてその役割を果たしている。龍はまさに中国文明にシンボルである。

これまで、人類が創造してきたさまざまな空想の動物のなかで、龍は人類の歴史と文化に深く結びついた別格の存在である。しかし、龍のイメージの形成に関して、西洋と東洋とでは発想が異なる。ギリシアの神話に頻繁に登場する西洋の龍(ドラゴン)の多くは、神々と対立する邪悪な敵とされ、退治されてしまう役割を担い、ヘラクレス、ゼウス、アポロンをはじめとする多くの神々や英雄たちによるドラゴン退治の話が語られている。

一方、中国では、龍が高貴な動物、吉兆を示す神聖な生き物として古くから信仰の対象とみなされ、神話や伝承の中で龍を殺すことは決してなかった。特に黄河流域のような乾燥地帯では、雨乞いの儀を行う権限を持つ皇帝は龍を生命と豊穡の象徴と見做し、龍に対して敵視するのではなく、供物をささげることで、龍が恵みの雨をもたらしてくれると信じていた。中国ではその点で、龍は神であり、自然そのものである。このような東西の龍の異なる性格は東洋と西洋の歴史に底流する自然観の違いを物語っている。

中国の龍の起源は古く、これまでの考古学的発掘研究により、およそ今から5000~7000年前に、中国北方地域の森や初期の農耕地帯で龍が「誕生」したことが明らかにされている。発表者はこれまで発見されてきた中国の最古級の龍の造形の多くに共通の特徴があることに注目している。それは龍の造形が「渦巻」状を表現していることである。例えば、遼河流域の5500年前の紅山文化遺跡から発見された玉猪龍、玉勾雲玉佩、同じ遼河流域の三星他拉村で発見された玉馬龍、4000年前の黄河流域の龍山文化の黒陶の盆にほどこされたとぐろを巻く龍、遼河流域の玉龍の影響を受けたとされる殷墟婦好墓から出土した玉彫龍、河南省安陽小屯遺跡の盆飾龍、殷や周の時代の青銅器に施された龍紋などのように、これらの龍の造形は中心に向かって渦巻く形となっているものがきわめて多い。それは回転の動力作用を表現しているとぐろであると考えられる。例えば、原始的に火を起こす方法も回転の動力を利用し、回転作用で生じた渦巻きの「目」から火が出る。その渦巻き状の「目」は、自然界の生きとし生けるものに潜んでいる生命の無限の力を象徴し、宇宙の根源のエネルギーの放出と宇宙の生成を象徴していると考えられる。その渦巻き状の形体を持つ龍の造形は、宇宙や自然のエネルギーの根源への深い理解、更に自然や生命への畏敬の念をもつ古代の中国人の自然観の現れであり、中国文明のシンボルとしての根源的姿であると言える。

[13:00-13:30]

社会的責任に関する各種国際的指導原則と人権・倫理

後藤 敏彦 (地球システム・倫理学会常任理事)

グローバリゼーションの進展の中で、環境、人権・労働、腐敗、等が、特に新興国・途上国で大きな問題となっており、2000年の国連総会に当時のコフィ・アナン事務総長が提案した国連グローバル・コンパクトに全世界で1万以上の組織が署名している。

2010年11月には社会的責任に関するISO26000ガイダンス文書が発行され、OECD(経済協力開発機構)も1976年に打ち出した多国籍企業ガイドラインを2011年5月に大改訂し、人権とサプライ・チェーンマネジメントを強化した。

また、国連事務総長特別代表のハーバード大学ジョン・ラギー教授の最終報告書が国連人権理事会に提出され、2011年6月16日に全会一致で採択され、国連の「ビジネスと人権に関する指導原則」となった。最終報告書と骨格は同じである2008年版ラギーレポートがISO26000やOECDガイドラインのベースになっている。

これらは全て21世紀の初頭からの動きが結実したもので、グローバリゼーションの進展の中で特に企業の行動に対して原則を提供するものであるが、現状を反映し西歐的価値観が少し色濃く出ていることは否めない。結果的に全ての指針等は、人権や倫理に重きを置くものとなっているが、人権に関して新しい義務を発生させたわけではないが、新しいフレーム・ワークを提供している。

こうした状況の背後には、20世紀後半からの世界時様性の変化がある。即ち、気候変動やリオ+20という国際交渉で物事がきまらなくなっていることや、西歐という既存の勢力とBRICSなどの新興勢力との覇権争い、などである。海図なき世界で、経済のメイン・アクターである(多国籍)企業に期待と節度が求められているのである。

さて、多くの原則が、企業は利潤追求のマシーンから脱し、社会の期待に応え付加価値と雇用を創出するもの、と根本的にパラダイムをチェンジしており、ますます国境の壁が低くなる21世紀の国際社会に大きな影響を与えだしている。

特に、ISO26000は政府・産業界・労働組合・NGO(非政府組織)・消費者団体・その他専門家の6セクターから国際委員が構成されており、いはば、全てのセクターが自分達のものという認識を持って活用しだしている。

こうしたことから、日本企業に対しても国内外でさまざまな影響も出だしていることから企業での取り組みも急ピッチで進みだしているので、こうした状況についても、いくつかの実例もあげておく。

[13:30-14:00]

ルドルフ・シュタイナーの思想における倫理性

西井 美穂 (広島大学・研究員)

ルドルフ・シュタイナー (Rudolf Steiner, 1861-1925) は、19世紀から20世紀にかけてドイツで、教育、建築、農業、医療など様々な分野において影響を与えた思想家である。彼の思想は人智学 (Anthroposophie) と呼ばれ、ギリシア語の *anthrōpos* (人間) と *sophia* (叡智) を組み合わせたもので、人間の叡智により、真の人間認識に到達するということを意味する。

近代から現代に時代が移る中で、シュタイナーは、時代の精神が加速度的に唯物的、利己的な方向に突き進んでいるとみた。こうした時代に危機感をもったシュタイナーは、「道徳的精神的 (moralisch-geistig)」なものを獲得することが時代の課題だと考え、「神の死の後」の現代における道徳性の回復をめざしたのである。

これまでの研究においてシュタイナー思想は、前期の哲学的思索を中心としたものと、後期の神秘主義的なものに分断され、研究対象はもっぱら後期思想であった。発表者は、前期思想と後期思想を連続性のあるものと捉え、思想全体に一貫して「道徳的精神的」なものが通奏低音のように響いていると考える。

前期思想におけるシュタイナーの課題は、カント的認識をどのようにして克服するかであった。人間自身が、物質と精神、客体と主体を切り離し思考することで、「物自体」は理性の彼岸に留まり続けると彼は考えた。対象を認識するとは、思考が対象そのものに入り込むことで、内から対象を体験するという思考体験である。それはまた、その過程で、認識主体が変容し、「自我 (Ich)」が、その「自我」をも含み他者へと広がる「全我 (All-Ich)」へと変容することでもある。自己においてこうした変容を実現することが、利己主義を超克することであり、これがシュタイナーのいう「道徳」であった。

後期思想では、この「道徳」はキリストの恩寵により実現されるというキリスト論として展開される。自己における愛の拡大が問題となるのである。

「3. 11」の東日本大震災により、人間中心で自己中心な生き方の見直しが迫られている。一世紀前にシュタイナーが取り組んだ、利己主義を超克し、他者へと愛を拡大させる問題は、今現実に我々が直面している課題でもある。シュタイナーの倫理性の考察は、我々が新しい地球倫理を構築していくための、手がかりになるのではないかと考えている。

[14:00-14:30]

チエホフ作『サハリン島』とサハリン開発

杉山 秀子 (駒澤大学)

現代におけるサハリンは天然ガス産出地としてサハリンを取巻く東アジアの国々、日本、中国、韓国の熱い視線をあつめている。

チエホフは今から120年余り前に友人の編集者スヴォーリンから軍資金を得て、1890年9月サハリン調査に乗り出した。当時すでに短編作家として文壇での地位は確立されていたが、1895年に『サハリン島』として長編記録を世に刊行することにより彼の作家人生に新境地が生まれた。19世紀末の帝政ロシア政権は社会の最底辺にいた囚人を強制移住の労働力として最果ての地に投下し、辺境の地の開発の道具としてつかい、背後からコントロールしようとしたが、必ずしもうまくいったとは言えない。チエホフはこの閉ざされた特異な社会と自然に生きる囚人や原住民の生活を克明に調査し問題点を浮き彫りにさせた。ここではチエホフが描いた過去のサハリンに光をあて1) 人口動態 2) 環境保全 3) 原住民の馴化 4) 帝政ロシア政権の取り組み方などを当時のプリズムを通して明らかにし、現代のサハリンとも比較検討しつつ、その未来像を探っていきたい。最後にチエホフはそもそもなにゆえに辺境の地サハリンをわざわざ取りあげたのか、その理由もあわせて考察してみたい。

[9:00-9:30]

産業遺産の再利用と教育を目的とした体験型観光

朝水 宗彦 (山口大学)

世界に先駆けていわゆる産業革命が起こったイギリスには古い工場や港湾施設、鉄道施設、鉱山施設などが今でも存在しているが、これらの近代化遺産は歴史的にも建築的にも価値がある。既に産業施設としては現役を引退しているが、外観を残したまま博物館や飲食店、土産物屋などとして再利用されているものも少なくない。このような近代化遺産が他の目的のために転用される傾向はドイツやフランスなど、いくつかの国々で見られる。

日本もまたアジアの他の国々に先駆けて近代化が起こり、イギリス同様に近代化遺産が少なからず存在している。日本における近代化遺産もまた、工場地帯、港湾、鉄道、鉱山など、様々な地域や施設で見られ、その中の一部は観光資源として再利用されている。近年「工場萌え」という表現が広まっているように日本各地には工場マニアが少なからず存在しているが、工場マニアの一部のみならず、少なからぬ歴史家や文明研究の専門家にとっても近代化遺産は興味深い対象であろう。

なお、日本の近代化を間接的に支えた施設として、学校、正確に言えば校舎がある。これらの校舎を広い意味での産業遺産として捉えると、都市部における古い校舎の一部は記念館として保存されていることが少なくない。他方、少子高齢化が進む地方においては廃校が進み、廃墟と化した元小中学校の校舎も少なくない。しかし、地方における元校舎は地域のシンボリック的存在であることが多いため、廃校舎を更地にするのではなく、何らかの形で再利用する場合も少なくない。たとえば様々な形態の体験型観光が進みつつある現在では、廃校になった地方の元校舎を自然体験型修学旅行のための宿泊施設や研修施設として再利用することも少なからず見られるようになった。本発表では、再利用されている産業遺産のうち、特に地方に立地する施設や設備を取り上げ、主に都市部から地方へ訪問する人々や彼ら／彼女らの活動内容について注目したい。

[9:30-10:00]

雇用、成長、自然を直視する新文明スタイル

高津 義典 (香川大学)

高い失業率、貧困の拡大、国際金融危機など資本主義の成熟とグローバル化に起因する諸問題が世界を覆っている。現代は一部の人がだけ平安を享受できればいいという時代ではないから、各国において所得再分配が指向されるが、国家財政悪化の壁が立ちほだかる。

だからといって「市場」を否定するのは現実的ではない。市場経済を前提としつつ働く意欲をもつ人びとに雇用の場を安定的に提供し、失業問題を緩和するよりない。雇用は付加価値が生産される場面で生まれ、一国の GDP とは付加価値額の総体であるから、雇用の拡大には経済成長が不可欠である。各国の政党がこぞって「景気回復と雇用確保」を掲げる所以である。

とはいえグローバル化が進むなかで、成熟段階に達した先進諸国が経済成長を続けるのは容易ではない。そのため「脱成長論」などが跋扈するが、各国・各地域が実情に即して雇用と成長に向けた有効な政策を追求する以外に、世界経済を安定に向かわせる現実的な道はない。雇用と成長とは現代経済における文明的課題である。

コブ・ダグラス型の生産関数を用いて、潜在成長率を「労働投入量」(労働者数と労働時間)、「資本投入量」(設備投資額から資本減耗を差し引いたもの)、「全要素生産性」の3要素に分けることができる。我が国経済の現状に即して成長の方策を考えれば次のとおり。

最近の日本経済では「労働投入量」が成長の引き下げ要因になっている。労働力率の引き上げなどに、なお工夫の余地があろう。「資本投入量」は成長の引き上げ要因ではあるが、その働きが低下している。サービス業投資、地域投資、グリーン投資、域外投資、文化関連投資などを振興して、重層的・多角的に新市場を創造する必要がある。

「全要素生産性」を引き上げるには技術革新が必要なことはもちろん “やせ我慢競争” からの脱皮、社会インフラの整備、産業構造の改善、労働市場の高度化・流動化などを通じて、経済と経営の効率を図る必要がある。

いっぽう世界が直面する環境、資源、災害など自然条件の制約に起因する問題には、さまざまな規制、公的介入、国際的枠組みなどを強化することによって対処するよりない。

これらを通じ文化・自然・国土などの視点を取り入れ、多様・多彩な市場を創造し成長をめざす。いいかえれば資本相互間、資本と労働間、経済活動と地球環境の間に関して非収奪的な市場を形成し、国内・国際経済体制のなかに埋め込むことが必要である。反・成長などの縮小主義からは適切な解が生まれぬ。

[10:00-10:30]

シンボリック相互行為理論から考える地域のあり方

服部 泰(東海大学観光学部)

様々な分野で「グローカル化(glocalization)」の重要性が叫ばれて久しい。社会学者のロバートソンやバウマンによって一般化したこの言葉は、一貫して世界普遍化(globalization)の功罪を指示しながら、様々な事象の地域(限定)化(localization)を推進してきた。マクロとミクロを対比したこの視点は、しかしマクロとしての「世界」とミクロとしての「地域」を断絶した関係として捉えることを出発点としている。

文明学的視点を考える場合、マクロとミクロは共存関係にある。マクロの視点で見れば「世界」は「地域」に収斂していく一方、ミクロの視点で見れば「地域」は「世界」そのものである。つまり、「地域」と「世界」は切り離すことのできないものである。

本発表ではミクロの視点となる「地域」、および集団としての地域を形成する「成員」に焦点を当てながら、「地域」と「世界」の関係性を捉えたい。とりわけ、地域を形成する各成員の視点から出発し、「地域」のあり方、「世界」との関係性を探る上で、社会心理学者のブルーマーやミードによって提唱されたシンボリック相互作用論の、文明学への応用可能性について検討したい。

シンボリック相互作用論は意味論に端を発し、集団における個人間の相互作用としての社会と自己の関係を描き出してきた。したがって、社会の分析および社会集団の分析、ならびに自己論において一定の成果を挙げてきた。一方で、自己と他者の動的連関を捉える同理論は、それゆえ独立した社会集団に適用されるにとどまってきたといえよう。しかし、この動的連関は独立した集団を超えて、「世界」とも結ばれている連関である。この視座をもとに、ブルーマーが説明する「共同活動」としての集団のあり方を、「世界」との動的連関をもつ「地域」に適用し、「地域」の新しいあり方、ならびに「地域」と「世界」が結ぶ関係について検討したい。

なお、多くの場合、経済活動において「地域」は「世界」と結びつけて考えることができるが、より人間的な活動として、とりわけ近年多くの地域が取り組む地域活性化の諸活動に焦点を当てる。

本発表を通じて、文化や社会の統合体としての文明を捉える際の、ミクロの視点とマクロの視点の接続にシンボリック相互作用論が有効であることを示したい。

[10:30-11:00]

社会のメディア的構成と風土性：ふさわしい倫理を持つこと

犬塚 潤一郎 (実践女子大学 生活文化学科)

現代社会の特徴として、インターネットの発達为社会構造に与えた変化が指摘されるが、都市および人間存在の構造的変化は、電子情報技術の発達に遡る以前からのひとつの傾向である。内燃機関と自動車の発明など運輸・交通網の発達が、都市の構造を自足・閉鎖的なものから連繋・開放的なものへと変化させたことなど、共同体としての都市の本質であるアウトルキー（自給自足）の意味の一貫した変化を、現代文明の特徴とみることができる。このことは必然的に、共同体と個人のモデルの変更と重なる。誰と共に生き、どのような人生を送るのかということは、何処で生きるのかという居住圏の問題と不可分であるが、住まうところが本質的にオープンな構造を持つようになれば、共同体も、自己の人生の具体的な成り立ちも、基礎的なかたちを変えてしまうことになる。今日の、ネットワーク的に構築される社会のモデルは、このアウトルキーの意味をオープン構造に置き換える一連の過程において捉え直すことができる。

このオープン性は、空間的な面だけではなく、時間においても強められる。それは、連繋—オープン性の発達が商品取引市場の拡大と表裏のものであったためである。自足・閉鎖的な都市・共同体では、市場は不足を補完するための付属的なものであるが、連繋・開放的なものでは、市場システムが都市の構造的特徴となる。土地(自然)、労働(人生)の商品化が進むとともに、人間世界の現実を構成するモノが全般的に取引商品として捉えられるようになり、未来に対する備えも取引媒介である金銭の備蓄に置き換えるモデルが一般化する。

近—現代の社会構造を、アウトルキーのオープン構造化、すなわち、都市、人生、市場といった人間世界を構成する中心的モデルが全般的にメディア構造化することとして特徴付ければ、地球環境問題はその構造の基本的欠陥の現れとしてみなすことができよう。メディア構造のうえでも、具体的な社会・人間活動は自然的環境・地球の上で営まれるからだ。人間と社会の環境との相互関係性(=風土性)の乗り越えは、事実上膨大なエネルギー消費によって行われてきた。それが破滅的プロジェクトであったことが、今日の文明危機の基盤をなしている。

メディア的に構成される社会の基礎問題を明らかにし、自然環境との現実の再構築(=風土性の回復)に向けた判断・行動の原理(=倫理)について考察・提示し、批判を仰ぎたい。

[11:00-11:30]

原発の温排水が日本海表面温度に及ぼす影響

平松 健男 (平松技術アドバイザ事務所 代表)

2011年の3.11震災以降、日本の原発54基は次々と稼働を停止し、12年5月には、全面停止した。原発の発電効率は約30%で、大量の冷却用温排水を7℃上昇(発電電力の約2.8倍のエネルギー)して海に還している。実質的に閉ざされた日本海では、温排水による海面温度の上昇が懸念されていた。実際、震災前には、日本海の温暖化に起因する下記の現象が見られた。

- ① 夏季：越前くらげが大繁殖
- ② 冬季：北陸地方のベタ雪(漁船が多数沈没)、首都圏の結氷減少
- ③ 今までなかった亜熱帯魚が散見

震災以降、①、②の現象は消滅した。但し、原発稼働中の韓国では越前くらげが繁殖している。

今回、原発の稼働停止を機に、秋田沖海面温度の低下量を定量的に明らかにした。秋田沖海面温度に影響する代表点として、日本海に流れ込む対馬海流(長崎沖)やリマン海流(稚内沖)、そして上空から流れ込む大気(輪島市)の3点の温度を選んだ。秋田沖海面には、各3点との温度差に比例した熱量交換があるとし、震災前における連続5年間を基準年と定め、温度相関係数を求めた。震災後の任意の1年間に測定された上記3点の温度と、基準年における相関係数とを使って計算した秋田沖の海面温度の推定値を求め、その温度と実測値との差を、原発の温排水による影響と見なした。

この手法で原発の稼働停止による秋田沖海面温度の低下を定量的に評価した結果、震災後8ヶ月(11年11月)で海面温度が低下し始め、15ヵ月(12年6月)には前年比2~3℃低下したことが確認された。

この解析方法では、太陽活動や気候変動などがあると、代表点3点の温度が変動し、自動的に秋田沖海面温度も変動する。従って、このようなマクロな変動成分を除いた外乱成分を検出することができ、原発の稼働停止で予測される温度変化があれば、温排水による影響と判断できる。

従来、人為的な発生熱量は、地表に届く太陽光の5千分の1以下なので、温暖化には無関係とされてきたが、ヒートアイランド現象を含む人為的な発熱も無視できないのではないかと考える。

地球システム・倫理学会クロージング公開シンポジウム 古典と伝統知

企画の趣意

丸井 浩（コーディネーター 東京大学）

古典的な名著をじっくりと読むことは、いつの時代にあっても、そして基本的にはどの学問分野においても重要な基礎となるはずである。多くの先人たちが時代の差異を超え、あるいは地域の差異を超えて読み継ぎ、沢山の思索をめぐらしてきたようなテキストを、いま広い意味での「古典」と呼ぶならば、古典を読み継いでいく伝統は、学術の発展、ひいては人類文化の繁栄にとって欠くべからざるものと思われる。ところが現実はどうかといえば、古典、古典的名著はますます読まれなくなっている。なぜなのだろうか。その理由はいくつもあると思われるが、現代という時代の特殊性がその背後に大きく働いているに違いない。

いささか乱暴なとらえ方になるかもしれないが、西洋近代以来、進歩と革新を旗頭としてきた科学・技術の進展は著しく、いまや、「経済成長・物的繁栄」ならびに「市場原理＝競争原理」を良しとするとするグローバルな潮流が加速度を増す中で、さまざまな矛盾を露呈する時代状況に、私たちは直面しているのではないだろうか。旧弊を脱し、自由にものごとを考え、新しい思考の地平を開いて、その成果を現実世界の中に役立てようとする創意工夫・技術革新の営み（イノベーション）は、それはそれで素晴らしい意味をもっているだろう。しかしだからといって、営々と築いてきた過去の伝統を、安易に切り捨ててよいであろうか。

新しいメニューを開発して、さらに美味しい食文化を開発しようとするチャレンジ精神と、老舗の味を守り続けようとする地道な伝統保持の努力とは、いずれも互いにゆずれない大切な意義を担っている。それと同じことが、学術の世界、あるいは広く思想・文化の領域においても、あてはまるはずだ。競争しながら新たな知見や技術の開発、組織・制度・様式の改革をひたすら追求しようとする方向性ばかりでなく、過去から積み上げ、発展してきた知的、文化的伝統を、おのおのが依って立つ時代と社会の中でその固有の意義を見直しつつ、未来世代へと受け渡していこうとする保持・継続の精神もまた、同じように大切にしなければならないはずだ。

歴史と伝統の重みを、今ともに生きる時代と社会の中で受けとめ、未来社会へと紡ぎつないでいこうとする営みが持つ意義を考える一つの糸口として、世界各地に息づく古典的テキスト（宗教聖典を含む）の研究において第一線で活躍する学者たちが、それぞれの専門領域を踏まえながら、古典研究の今日的な重要性をあらためて問い直し、伝統知の継承・発展の未来社会的意義を論じ合う場を作る必要がある、というのが本シンポジウムの企画に至ったゆえんである。

古典と伝統知

宮本 久雄（上智大学）

伊東俊太郎氏に拠ると、人類革命、農業革命後に都市が勃興し、精神革命を経て科学革命を経験すると同時に、核兵器の出現や環境問題が深刻となり、人類絶滅の危機に直面している今日、環境革命がそこに緊急に要請されてきている。そこで「古典と伝統知」が今日どのように甦って、現代の科学技術文明やその思想がもたらした危機に対処し、将来世代へ希望のメッセージを発信しうるかが本発表の方位となる。

本発表は如上の危機の如実な歴史的具現と象徴とをアウシュヴィッツおよび FUKUSHIMA として理解し、その悲劇的危機を生み出した思想的温床を「存在-神-論」(Ontotheologia) に求める。存在-神-論とは、まず最普遍的なものや概念（例えば「存在するもの」(to on, ens)）を措定する。そしてそれらを究極的に原因し支配する原理（例えば、第一目的、理性、神など）を同時に立てる。それに拠って全世界の万有を第一原因との関係性の網の目に布置・定義し、こうして各事物、各概念の身分と価値を定め、それだけでなく制御し支配する。その意味で存在-神-論は、一種の全体主義と言える。ハイデガーに拠ると「技術学」的存在-神-論の現代にあつては、万有を「用材」「商品」として駆り立てる「総駆り立て体制」(Gestell)こそ、現代の神なのである。この体制の下では、廃材や無用な人間は「生きる資格のない者」として遺棄される。例えば、その全体主義的遺棄の場こそ、「忘却の穴」としてのアウシュヴィッツ機構であつたと言えよう。

本発表は如上の存在-神-論に対して、旧新約テキストを物語り論的視点で解釈する。というのも、アウシュヴィッツが示す人間の抹殺法はまさに記憶と記憶に拠る物語りの剥奪を媒介とした人間の「生ける屍」化にあるのに対して、物語りは人間の誰（ペルソナ）を問いつつ、彼の物語りを「忘却の穴」から奪い返そうという試みだからである。

本発表では、インド・アリア語族に拠る空間的存在論に対し、旧約の「出エジプト記」物語りにおけるヘブライ語脱在動詞「ハーヤー」や「エヒイエ」およびヤハウエ神の振舞いに注目し、そこから「エヒエロギア」の思想的内実と将来的可能性とを提案したい。というのも、エヒエロギアは全体主義的存在-神-論とその機構をいわば内外から突破し、それらの全体主義によって抹殺された他者（これには自然も含まれよう）の地平を抜き、そこに人間的協働と人間と自然との協働の物語りを企投し、その現実化歴史化を志向すること（言即事）だからである。

近代の思考の反省と伝統知：過去と未来を結ぶ古典の言葉

手島 勲矢（日本学術会議第1部連携会員）

3・11の東日本大震災の津波、それに伴う福島原発事故、また、9・11の同時多発テロ攻撃などを通して、21世紀は様々な自明とされてきた常識が見直されなければならない時代——こういう感慨を抱いた人も少なくないと思う。近代的なシステム思考の反省に関して、すでに様々な取り組みはあるけれども、私は、古典研究の立場から、その反省はまず私たちの思考単位の反省から始まるべきであり、古典と伝統知の知見は、今の時代の常識の見直しの目的に資すると主張したい。

言わずもがな、世界各地の社会秩序を支える近代的なシステム思考（合理主義）は地域ごとに複雑な過程を経て形成されていて一様ではない。とはいえ、少なからず19世紀から20世紀にかけての西欧文明の中の社会変革をモデルにしていることも事実であり、その社会変革は思考単位（ユニット）の革新に負うところが少なくない。例えば、トインビーは、英国の歴史を研究しながら、国民国家の単位では、ローマ帝国が支配したブリテン島の時代からアジア・アフリカの植民地を含みこんだ大英国帝国の歴史を考えるのに不都合なことから、「文明」という単位で歴史研究することを提案し、人類や地球規模で歴史を考える扉を開いた。またアインシュタインは、ニュートン力学のような、従来の地球単位の物理学ではなくて宇宙単位の物理学を模索し、相対性原理に辿りついた。つまり、近代の思考単位の変化は、一方では、実証主義的な真実追求の姿勢がもたらした必然的な結果（天動説から地動説への変化）でもあるが、他方、それは、ある地域の人々が向き合う問題に対してなされた恣意的な選択の結果でもある。特に西欧の文脈においては、神・信仰・宗教を捨てて、自然・理性・科学へと、彼らの思考の基本単位が17世紀ごろからシフトしていくが、この変化は、人々が求めた政治的な選択であって、決して物理学上でおきる変化と同じ種類のものではない。事実、21世紀に入り国際情勢を見ても米国やヨーロッパの内政を見ても、解決したはずの宗教問題（例えば、政教分離、キリスト教とイスラームの軋轢など）は再び大きな比重を占めるようになっている。

もし、今、私たちの常識が問題解決の障害になっていると感じる状況があるのなら、それは、私たちが現在用いている思考単位そのものにも問題があるのではないか？その点で、今なお世界各地で続く古典解釈と伝統知の世界を知ることは、近代的な思考単位の問題を俯瞰する視点の形成に資すると愚考する。なぜなら、古典テキストは、人類が原初から持ち続けている大事な言葉（語彙）の缶詰であり、古典解釈の変化の歴史を知ることが、近代システムの為に近代人が（それぞれの文明圏において）行った言葉の取捨選択の実態を知ることにつながる。例えば、「西洋古典」という単位は、現在の日本のアカデミアでは、主にギリシア語・ラテン語で書かれた文学や哲学を意味する単位であり、現実に西洋の思想・文学の伝統形成の上で聖書やユダヤ教・キリスト教の文書が、またヘブライ語がいかに重要であったとしても、それらは考慮から除外される。当該発表では、私は、この様な現在の思考を支える単位などについて、ヘブライ語とユダヤ古典学の観点から思うところを述べ、今を考えることに資する古典と伝統知のあり方とは何かを考える材料を提供したい。

ズハイルのムアッラカ（カスイーダ）について

池田 修（大阪外国語大学名誉教授）

ズハイル（zuhayr b. abī sulmā、530-627）によるカスイータ（qaṣīda、長詩）はジャーヒリーヤ時代のすぐれた詩人7名の代表作一編ずつで構成されたムアッラカート（mu‘allaqāt）詩集の3番目に載せられている。この長詩はムッラ（murra）族の二人の有力者が長期間続いたアブス（‘abs）族とズブヤーン（dhubyān）族との戦争（dāhis と alghabrā’の戦い）を調停、終結させた功績を讃えた、いわゆる賞賛詩（madh）である。

ズハイルは優れた詩人に取り巻かれた一家の出で、自身の子をはじめ多くの詩人を育て、賞賛詩の分野では、現代まで影響をあたえている。ただ、彼は後世の詩人と異なり、賞金目当てに過度の自己卑下、相手に対するへつらいを表すような言辞を弄することはなかった。誰に対しても事実でないような褒め方はしなかった。（lam yamdaḥ’ahadan illā bi –mā fihi）。

ズハイルは詩作に当たっては長時間にわたり工夫に工夫を重ねるタイプの詩人で、最高の詩をhawli（一年かけた作）であると見なし、自身の詩集をhawliyatと呼んでいる。アルアスマイー（al’aṣma’ī 740-828）はズハイル一派の詩人たちを詩の奴隷達（‘abid alshi‘r）と呼んでいる。

カスイーダは動調qaṣada（あるものをめざして進む）の派生語であるが、詩人は主題を取り上げる前に、回り道をして、目的地に達するという手法に従う。即ち、愛の序詞、ラクダによる旅、主題（賞賛、風刺、哀悼など）の3部構成が完成された長詩の基本的な姿である。脚韻のことを、なぜか、qāfiya（首を打つもの）と呼んでいるが、詩人の宣託が威力を持つ恐ろしいものであったことを伺わせる。このようにアラブの長詩は内容が多様で、上下連句を重ね100行以上に達するものもある。

ズハイルのムアッラカは、ラクダによる旅の部分がかけた二部構成で59行、ムアッラカート詩集の7編の中では一番短い。この詩が注目されるのは、部族間闘争で武勇の発揮を称揚する詩人が多い中で、戦争がもたらす惨禍を数え上げ、平和の大切さを訴えている。27行および28行で、神の全知性や清算の日（yawm alhisāb）に言及している2点である。特に後者については、ジャーヒリーヤ アラブが正道に導かれず、多神教徒として非難されているのに対して、ズハイルの長詩は、イスラームと言う新宗教のプロトタイプの精神的様相が育っていたことを伺わせている。

第2代正統カリフ、ウマルはズハイルの頌詩を聞いて、“それこそ神の使途だ”と叫んだ、（kitāb alaghānī 9-153）とつたえられているが、これも、イスラームのルーツにジャーヒリーヤ時代のアラブ精神があることを示唆する逸話であろう。

儒教と道教 —伝統知としての和の思想—

井出 元 (麗澤大学)

「人間の智恵と智識の総力を挙げて解決しなければならない問題は、人間がいかにか人間らしさを見失うことなく、その生を享受するかにある」。これは中国文明が育んだ現実主義の立場をつらぬく人間尊重の精神である。

近年、長江流域の考古学的研究の進展により、中国大陸において黄河文明とは異なる精神文明の存在を知ることとなった。

黄河流域では、その風土的な特質から畑作、牧畜を営む文化が萌芽した。そのためには土地の開拓と獲得は必須であり、部族間の闘争が頻繁に行なわれた。したがって縦の秩序が尊重され、天(天帝)を崇める精神文化が創造された。これに対して、長江流域では稲作と漁労を営んだ。そのため集落ごとの共同作業が主であり、横の秩序が尊ばれた。水源や資源の確保を第一とすることから、自然との共生を前提とし、自然界の秩序を尊び、多くの神々を祭った。

このような風土による文化の差異は、二つ思想を輩出した。「人、能く道を弘む。道、人を弘むるにあらず」と人生を第一として生きることの重みを説いた孔子によって、人間の善意と理性の限りなき向上に期待を寄せ、「修己治人」を眼目とする儒教の礎が築かれた。

これに対して、老子は「道」を自覚することによって、戦乱の世を川(水)の流れのごとくに「無為自然」の生き方をもって歩むことができるとし、それは生命の保全を第一とする道教の礎となった。この老子が提示した「道」の思想は、唯一の価値に目覚めることの重要性を説いたものであり、それは砂漠の民が「神」を創造したことに匹敵する文化史的意味を持つものである。

両者は、一見対照的なものであるが、対立し排斥しあうものではなかった。理想を高く掲げ、人の善意に基づく平和な社会をめざす儒教(孔子)の立場と、しっかりと現実を見据え、一人一人の安心と幸福を求める道教(老子)の立場とは、それぞれの役割を担い中国文化に深く根を下ろし、悠久の歴史を経て東アジアの精神文化を形成したのである。

そして、この二つの思想に共通するのは「和」を尊ぶ温かな精神である。孔子は「和して同ぜず」として、実生活の中で「天道」に従って、不動の信念をもって主体的に人間関係の和を実現していくことによって理想社会の実現を期した。これに対して老子は「和を知るを常という」と人間をも含む宇宙全体に流れる秩序を「常(道)」とする自覚することを説いた。そして「足るを知るの足るは常に足る(満ち足りているという満足を知る人は、いつでも満ち足りている)」と述べ、「知足」の心境に至ることによって運命や境遇、さらには時代の流れや社会の動向など、身の回りにおきるすべてのものとの「和」を実現していくことができるとした。

このように中国の伝統的な精神文化の二つの源流をたずねることによって、改めて東アジアで育まれた伝統知の理想の高さと広がりを知ることができるであろう。